

# 大野遺跡Ⅰ

—基盤整備促進事業（八幡地区2-2工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2017年3月

兵庫県南あわじ市教育委員会

## はじめに

兵庫県最南端に位置する南あわじ市は、周囲を海に囲まれた自然と歴史が豊かなまちです。また市内の中央部に位置する島内最大の三原平野を中心とする平野部では、温暖な気候を生かした多角的な農業が盛んに行われています。

これまで、この豊かな南あわじ市では、実り多き社会実現に向けた政策や事業が進められてきました。圃場整備事業もその政策の一つですが、事業の性格上、埋蔵文化財の調査が必要となり、これまで幾度となく行われてきた発掘調査により、先人達の「あしあと」ともいべき文化財が数多く残されていることが明らかとなってきました。これら先人達が残した文化財を後世に保存・継承し、それらの特性を生かした活用を、今後我々は新たな課題として取り組んでいかなければなりません。

まだしばらくは、圃場整備事業などの大規模な開発事業が続くと思いますが、教育委員会としてもより一層文化財の保護・活用に努めていく所存ですので、ご支援賜りますようよろしくお願いします。最後になりましたが、調査及び本書を作成するにあたり、ご指導ご協力いただいた方々に対し心よりお礼申し上げます。

平成 29 年 3 月

南あわじ市教育委員会  
教育長 浅井 伸行

## 例言

1. 本書は、兵庫県南あわじ市製菓八幡南～立川瀬所在の大野遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、基盤整備促進事業（八幡地区）の工事に伴い、南あわじ市農地整備課の依頼を受け、南あわじ市教育委員会を主体として、平成 20（2008）年度に実施した。
3. 機械による機械掘削は（株）ダイニチ・コンストラクション淡路本店、遺構掘削等の人力作業は南あわじ市シルバー人材センターにそれぞれ依頼した。
4. 本書の執筆・編集、発掘調査・遺物の写真撮影は坂口が行った。
5. 本調査に関する写真・図面記録・出土遺物は、南あわじ市埋蔵文化財調査事務所に保管している。
6. 発掘調査及び報告書作成にあたり以下の機関・個人からご指導・ご協力をいただいた。記して深く感謝申し上げます。（敬称略）  
八幡地区・八幡南地区・立川瀬地区自治会、兵庫県教育委員会、南あわじ市農地整備課、藤本史子、森岡秀人

## 凡例

1. 本調査の水平方向の位置については、第 V 系同地上座標値（世界測地系）に基づき、垂直方向の位置については、圃場整備事業で使用している水準点の標高値を利用した。また本書で示す方位は座標北を示す。
2. 本書で使った遺構番号については、調査時の遺構番号を使用し、その前に以下の遺構の性格を表す記号を付した。なお建物については調査区ごとに 1 から順に番号を付している。  
SB 掘立住建物 SK 土坑 SD 溝 P 柱穴・小穴 SA 杭・樁 SX その他の遺構・不明遺構
3. 層存図などの色調は『新版標準土色図』（農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修）を参照した。
4. 出土遺物の法帖等を記した表の（ ）の数字は発掘順、□の数字は復元順を示す。
5. 土器・陶器断面の■は須恵器、■は瓦器・瓦質土器、□は寺塚・白磁・施釉陶磁器、□は縄文土器・土師器を表す。
6. 本書収録の遺物は、3 次（確認）調査、4 次（本発掘）調査で出土した遺物に 1～121 の順に通し番号を付け、それぞれ本文・挿図・写真図版の統一をはかった。

# 本文目次

## 第1章 調査の経過

第1節 調査の経緯	1
第2節 調査の体制	1

## 第2章 周辺の環境

第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	5
第3節 周辺の小字名	8

## 第3章 3次調査の成果

第1節 調査内容	9
第2節 まとめ	11

## 第4章 4次調査の成果

第1節 1区の調査	12
第2節 2区の調査	14
第3節 3区の調査	23

## 第5章 総括

第1節 縄文時代	27
第2節 奈良時代	27
第3節 平安時代	29
第4節 中世	32

## 挿 図 目 次

図 1 基礎整備促進事業（八幡地区）に伴う調査位置図	2	図 17 2区SA1平面・層序・断面図	17
図 2 造跡の位置	3	図 18 2区出土遺物1	17
図 3 淡路島南部の地形	3	図 19 2区出土遺物2	19
図 4 淡路島南部の地質	4	図 20 2区出土遺物3	20
図 5 調査地周辺等高線図	4	図 21 2区出土遺物4	21
図 6 集積地域の主な遺跡	6	図 22 3区平面・層序図	22
図 7 調査地周辺小字名図	7	図 23 3区SK19平面・層序・断面図	23
図 8 調査区設定図（確認調査）	9	図 24 3区SB1平面・層序・断面図	24
図 9 確認調査区平面・層序図	10	図 25 3区SD24・SK50平面・層序・断面図	24
図 10 確認調査区出土遺物	11	図 26 3区SB2・SA1平面・層序図	24
図 11 調査区設定図（本発掘調査）	12	図 27 3区出土遺物	25
図 12 1区平面・層序図	13	図 28 奈良時代の遺構想定範囲	27
図 13 1区出土遺物	13	図 29 須恵器の法量分布と径高指数・外径傾係数の変化（淡路島内）	30
図 14 2区平面・層序図1（南部）	15	図 30 須恵器の径高指数・外傾係数の変化（郡城周辺と播磨地域）	31
図 15 2区平面・層序図2（北部）	16		
図 16 2区SB1平面・層序図	17		

## 表 目 次

表 1 基礎整備促進事業（八幡地区）に伴う調査一覧	1	表 4 出土遺物2	35
表 2 奈良時代の須恵器の法量（淡路島内）	29	表 5 出土遺物3	36
表 3 出土遺物1	34	表 6 出土遺物4	37

## 写 真 図 版

### 写真図版 1

調査地周辺空中写真（上が北）

### 写真図版 2

1. 調査地遠景（南東より）
2. 人力作業風景（3次調査・北西より）
3. 3区重機作業風景（4次調査・東より）
4. 3区人力作業風景（4次調査・南東より）
5. 3区補助員作業風景（4次調査・北西より）

### 写真図版 3

1. 1区近景（東より）

2. 1区全景（西より）

3. 1区北壁（2a区）

### 写真図版 4

1. 2区近景（北東より）
2. 2区全景（南部・北より）
3. 2区全景（北部・南より）

### 写真図版 5

1. 2区東壁（0a～1a区）
2. 2区東壁（SX40南側畦畔部分）
3. 2区SB1・SX32（南東より）

4. 2区SB1 (南より)

5. 2区SB1 (P4) 北西壁

6. 2区SB1 (P7) 南東壁

7. 2区SB1 (P16) 南壁

8. 2区SK20 (東より)

写真図版6

1. 3区近景 (北東より)

2. 3-1a~5a区 (東より)

3. 3-6a~13a区 (東より)

写真図版7

1. 3区北壁 (杭8a)

2. 3区SB1 (東より)

3. 3区SB1 (P21) 西壁

4. 3区SK19遺物出土状況 (北東より)

5. 3区SD9 (北より)

6. 3区SK50 (南より)

写真図版8

3次調査出土遺物 (1~10)

4次調査1区出土遺物 (11~22)

4次調査2区出土遺物 (23~31・33~41)

写真図版9

4次調査2区出土遺物 (42~56)

写真図版10

4次調査2区出土遺物 (57~77)

写真図版11

4次調査2区出土遺物 (78~95)

4次調査3区出土遺物 (96~121)

4次調査石器 (32・94・95)

## 第1章 調査の経過

## 第1節 調査の経緯（図1）

本調査の調査経緯となった基盤整備促進事業（八幡地区）は、市が事業主体の団体営圃場整備事業で工事施工範囲は現行政区画の八幡南地区を中心に八幡・立川瀬地区の範囲となる。

事業は、平成19～21年度の3カ年にかけて合計16.8haの面工事が実施され、調査地中央を南から北方向に流れる山路川を挟んで大きく2分される。工事は山路川西側から東側へと進行し、それにあわせて教育委員会においては、表1・図1の通り埋蔵文化財の調査を進めてきた。本報告は大野遺跡の3・4次調査（表1 7・8番）の調査成果である。

番号	地区名	工事面積	遺跡名	調査内容	調査期間	調査面積	備考
1				分布	平成17（2005）年2月4日～14日	16.8ha	
2	1工区	2.9ha	岸ノ上遺跡（1次）	確認	平成18（2006）年10月2日～13日	120㎡（30ヶ）	
3			岸ノ上遺跡（2次）	確認	平成19（2007）年6月4日～7月3日	39㎡（12ヶ）	
4			岸ノ上遺跡（3次）	本発掘	平成19（2007）年6月4日～10月24日	2,462.6㎡	
5	2-1工区	1.0ha	大野遺跡（1次）	確認	平成19（2007）年10月29日・30日	48㎡（12ヶ）	
6			大野遺跡（2次）	本発掘	平成19（2007）年12月10日～平成20年1月18日	504.7㎡	
7	2-2工区	4.2ha	大野遺跡（3次）	確認	平成20（2008）年6月16日～27日	164㎡（41ヶ）	本報告
8			大野遺跡（4次）	本発掘	平成20（2008）年7月17日～8月28日	543.3㎡	
9	3工区	8.7ha	大野遺跡（5次）	確認	平成20（2008）年9月22日～11月7日	268㎡（66ヶ）	
10			大野遺跡（6次）	本発掘	平成21（2009）年6月22日～9月18日	896.8㎡	
合計		16.8ha				639㎡（161ヶ） 4,407.4㎡	確認合計 本発掘合計

表1 基盤整備促進事業（八幡地区）に伴う調査一覧

## 第2節 調査の体制

## 平成16年度 分布調査

**事務局** 教育長 塚本圭右 部長 中島義晴 次長 柳本佳博 生涯学習文化振興課長 岸上敏之  
主幹 太田孝次 課長補佐 榎本重雄 係長 福田龍八

**調査担当** 埋蔵文化財調査事務所 谷口梢（当時） 外業補助員 新崎都 内業補助員 垣脇美奈子・豊田亜希子・榎本早苗

## 平成20年度 大野遺跡 3次（確認）・4次（本発掘）調査

**事務局** 教育長 塚本圭右 部長 三好雅大 次長 南卓正 生涯学習文化振興課長 岸上敏之



図1 基盤整備促進事業（八幡地区）に伴う調査位置図

主幹 垣本義博 課長補佐 福田龍八

調査担当 埋蔵文化財調査事務所 坂口弘貞 外業補助員 白川裕二・富岡美早子  
内業補助員 赤井友美・垣脇美奈子・豊田亜希子・濱崎真紀・榎本早苗・三宅靖子

平成28年度 遺物整理・報告書作成

事務局 教育長 岡田昌史（平成28年4月1日～平成29年2月12日） 浅井伸行（平成29年3月3日～3月31日） 教育次長 藤岡崇文 社会教育課長 福原敬二 副主幹 福田龍八

整理担当 埋蔵文化財調査事務所 坂口弘貞 内業補助員 赤井友美・宇治田力・垣脇美奈子・白川裕二・富岡美早子・豊田亜希子・濱本善美・榎本早苗・三宅靖子・松下矩之

## 第2章 周辺の環境

### 第1節 地理的環境 (図2・3・4・5)

遺跡が位置する淡路島は、兵庫県最南端、瀬戸内海の東端に位置しており、北を明石海峡、南東を紀淡海峡、南西を鳴門海峡に画された周囲約203km、面積592km<sup>2</sup>を測る南北に細長い瀬戸内海最大の島である。

地質的には、花崗岩と大阪層群からなる北部と和泉層群からなる南部に大別される。南部の和泉層群は主として礫岩・砂岩・泥岩と砂岩・泥岩の互層などからなる論鶴羽山地が南東部に、南辺寺山系の山地が西部にそれぞれ位置しており、その間には島内最大の平野である三原平野が広がる。この三原平野には南から大日川、三原川、成相川、倭文川の4本の主要な河川があり、河口近くの松帆付近で合流し播磨灘に注ぐ。先の三者は南東の論鶴羽山地から北西方向に流下する。今回



図2 遺跡の位置

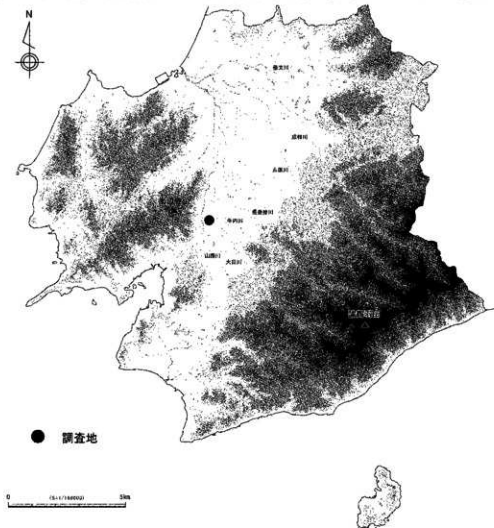


図3 淡路島南部の地形



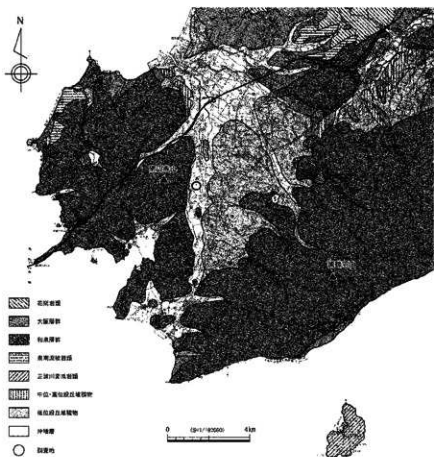


図4 淡路島南部の地質

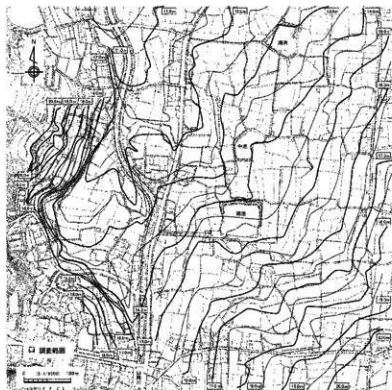


図5 調査地周辺等高線図

の調査対象地は、南東から北西方向に緩やかに傾斜する大日川の支流である山路川中流右岸域に位置しており、標高 11.98 ～ 15.21 m を測る。

#### 【参考文献】

- 『三原郡史』三原郡町村会 1979  
 『淡路志加川神田南遺跡』兵庫県教育委員会 1987  
 『洲本地区の地質』通商産業省工業技術院地質調査所 1992  
 『淡路島の化石』淡路文化史料館 1996

## 第2節 歴史的環境 (図6)

ここでは大野遺跡が位置する賀集地域を中心とした歴史的環境について見ていきたい。

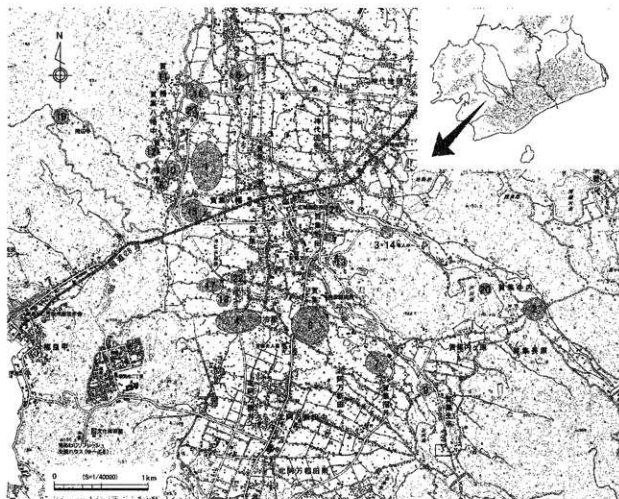
**旧石器・縄文時代** 市内同様賀集地域においても遺跡は少なく、遺構の様相は把握しにくいものの、少しずつ遺物の確認例が増加している。旧石器から縄文時代草創期に位置付けられる有舌尖頭器がこれまで知られていた**2**長原遺跡(賀集牛内)以外に**3**楠谷遺跡(賀集野田)においても認められる。両遺跡は牛内川流域に分布する共通点を有する。また**4**神子曾遺跡(賀集鍛冶屋)では獣・魚骨片を含む縄文時代中期の土坑**4**基や今回調査を行った**1**大野遺跡(賀集八幡南～立川瀬)では晩期の遺構・遺物が見つかっている。

**弥生時代** 遺跡数は飛躍的に増加する。また近年の調査により複列地域の楠多遺跡(複列上楠多～下楠多)や阿方地域の井手田遺跡(阿方上町)のように居住域と墓域が確認できる大きな集落が幾つか判明してきた。賀集地域では**5**嫁ヶ沢遺跡(賀集立川瀬)・神子曾遺跡・**6**護国寺東遺跡(賀集八幡南)・**7**高萩遺跡(賀集福井)・**8**久保ノカチ遺跡(賀集福井)・**9**祢ノ木遺跡(賀集生子)などがある。その内、神子曾遺跡では中期を中心として堅穴住居**1**棟、周溝墓**18**基など、護国寺東遺跡では終末期頃の堅穴住居**3**棟がそれぞれ確認されている。さらに大日川沿の中流から上流にかけて高萩遺跡・久保ノカチ遺跡・祢ノ木遺跡といった中期や終末期の遺跡が点在することが分かってきた。**10**岸ノ上遺跡(賀集八幡南)では、前期と終末期の遺物が確認されており、周辺に集落が想定される。

**古墳時代** 賀集地域をはじめ市内の古墳分布は非常に少ないものの、三原平野を開む山地や丘陵上、裾部において古墳が確認できる。賀集地域においては中央の平野部を挟んで西の南辺寺山山裾に**11**西山北古墳(賀集八幡北)・**12**西山南古墳(賀集八幡南)、東の鷲輪羽山から続く丘陵上には**13**野田山古墳(賀集野田)と**14**小山古墳(賀集野田)がそれぞれ分布している。先の3者は横穴式石室を内部主体とするが、小山古墳のみ内部主体が不明である。時期については西山南古墳を除いて6世紀後半頃が想定される。

一方集落跡については、賀集地域だけでなく三原平野全体を見ても確認例は少なくなると同時に分布に偏りが認められる。水田経営に適さない扇状地には、扇端部を除いて遺跡分布は認められなくなる。平成17～20年度に調査を行った木戸原遺跡(市新～三條)は、扇端部から沖積平野にかけて立地する中期を中心とする大規模な集落跡で、多量の滑石製品や韓式系土器・鉄鋌等が出土しており注目される。

賀集地域では堅穴住居の確認例はないが、**15**平松遺跡(賀集八幡)で旧河道や溝から中期の遺物が、



- |          |            |              |           |          |
|----------|------------|--------------|-----------|----------|
| 1 大野遺跡   | 2 長原遺跡     | 3 楠谷遺跡       | 4 神子曾遺跡   | 5 嫁ヶ浜遺跡  |
| 6 藤岡寺東遺跡 | 7 高萩遺跡     | 8 久保ノカチ遺跡    | 9 芥ノ木遺跡   | 10 岸ノ上遺跡 |
| 11 西山北古墳 | 12 西山南古墳   | 13 野田山古墳     | 14 小山古墳   | 15 平松遺跡  |
| 16 石ヶ坪遺跡 | 17 才門遺跡    | 18 石田遺跡      | 19 南辺寺古堂跡 | 20 戸川池遺跡 |
| 21 土久保遺跡 | 22 賀集城ノ腰城跡 | 23 西山中殿ノ十井筒跡 |           |          |

図6 賀集地域の主な遺跡

岸ノ上遺跡では溝から前・中期の土器がある程度まとまって出土していることから周辺に集落が存在するものと思われる。

**奈良・平安時代** 淡路島は北の津名郡と南の三原郡の2郡で構成される淡路国となる。淡路国府の位置については、文献史料から三原平野のいずれかに位置したものと推定されるが、いまだ考古学的には確証は得られていない。ただし嫁ヶ浜遺跡では大規模な建物群や蹄脚円面硯等の出土から国府又は郡衙関連遺跡と考えられる。

平安時代に編纂された『倭名類聚抄』に三原郡7郷の名が記される。その中に「賀集郷」が見られ、およそ現在の賀集地域の範囲が古代賀集郷の範囲と理解されよう。近年山路川中流域にある16石ヶ坪遺跡(賀集八幡北)・岸ノ上遺跡・大野遺跡・17才門遺跡(賀集鍛冶原)・18石田遺跡(賀集鍛冶屋)等、古代の掘立柱建物の確認例が増加している。特に岸ノ上遺跡では飛鳥時代～平安時代初め頃の倉庫群、対岸の大野遺跡では円面硯などが確認されており、一般集落とは異なる性格を持つ遺跡

と評価できる。さらにこれら賀集地域西部の山路川や大日川流域に位置する古代の遺跡からは飛鳥時代～平安時代初め頃の製塩十器が多量に出土する事例が増えており、新たな研究課題となっている。

奈良時代後半には淡路園分寺（八木園分）と同分尼寺（八木新庄）が八木地域に造営されるが、その他の古代寺院の分布は、市内をはじめ島内でも少ない。賀集地域では、19 南辺寺古堂跡（賀集八幡南）などが平安時代中頃になって造営されたようである。また島内の須恵器生産は7世紀に輪鶴羽山北西部の汁谷窯跡（神代黒道）で始まり、賀集地域では奈良時代末～平安時代初め頃に20 戸川池窯跡（賀集牛内）でも生産が開始される。

**中世・近世** 中世に入ると遺跡数はさらに増加し、市内全域で確認できるようになり、岸ノ上遺跡でも建物群が確認できた。またこの時期は高萩遺跡・久保ノカチ遺跡・21 上久保遺跡（賀集野田）など、扇状地上にも集落が拡大する。集落以外では22 賀集城ノ腰城跡（賀集賀集～鍛冶屋）や23 西山中殿ノ土井館跡（賀集八幡中）等の小規模な城館跡が幾つか認められる。これらの城館跡は「護国寺文書」

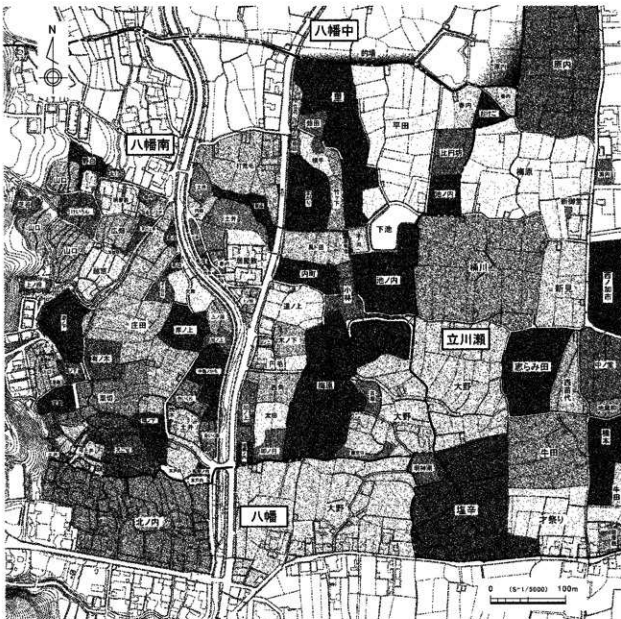


図7 調査地周辺小字名図

に見える賀集氏など在地の国人クラスの城館と考えられる。またこれら在地の国人達は、護国寺への田島の寄進を盛んに行っており、寄進された土地の中には八幡南地区にある字「梅原」地内が含まれているものと考えられる。

#### 【参考文献】

- 『三原郡史』三原郡町村会 1979  
『護国寺誌』1996  
『角川日本地名大辞典 28 兵庫県』角川書店 1991  
『平成 16 年度年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2006  
『南あわじ市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』南あわじ市教育委員会 2008  
『南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』南あわじ市教育委員会 2009  
『南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』南あわじ市教育委員会 2010  
『南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅳ』南あわじ市教育委員会 2011  
『高萩遺跡』南あわじ市教育委員会 2011

### 第 3 節 周辺の小字名 (図 7)

近年の大規模開発や行政区画の統廃合が進み、市内の小字名は急速に復元が困難になりつつある。ここでは、今後の参考資料になると思われるため、調査地周辺の小字名を提示しておく。3 カ年の調査対象地は、大字八幡南を中心に立川瀬、八幡地区からなる。

### 第3章 3次調査の成果

#### 第1節 調査内容 (図8・9・10 写真図版8)

3次調査は事業範囲の北部(2-1工区)を対象に行った確認調査である。調査地は県道福良・江井・岩居線に隣接する地区で、南東から北西方向に緩やかに傾斜しており、標高11.98~14.55mを測る。調査区は2×2mの調査区を41ヶ設定して重機・人力併用で進めていった。

調査の結果、本地内のベースは砂層となり、部分的に礫が含まれることが多い。県道に近いNo.1~4調査区は一段低くなっており、調査地西側を流れる山路川の氾濫原と想定される。遺構又は遺物包含層は東側の一段高い微高地部分3ヶ所(A~C地点)で確認することができた。

#### A地点

調査地中央西寄りに位置する。No.13調査区でSK1とP2、No.37調査区でP1・2を確認した。尚調査区のベースには礫が多く含まれていることから遺構との識別が困難であるが、遺構埋土は礫の含み具合が少なく、色調がわずかにうすい。遺物はNo.13のSK1から土師器・瓦質土器、P2から瓦器・土師器、No.37のP2からは土師器(8~10)が出土しており、中世前半頃の年代が想定される。

No.36調査区において、調査区東の中池の方向から東西方向にのびる幅40cm、深さ20cmのSD1を確認した。遺物は磁器(染付)が出土しており、近世頃と思われる。湧水が著しい。

#### B地点

調査地中央東寄りに位置する。No.16調査区の北東端でSK1を確認した。深さは約15cmである。遺物は土師器・瓦器(1)が出土しており、中世前半頃と考えられる。

No.39調査区では、中世頃の遺物包含層を確認している。

#### C地点

調査地南部南池の北側に位置する。No.26調査区でSD1・P3・SK4を確認した。SD1とP3・SK4の埋土は異なり、前者が白色系で後者が灰色系をなす。

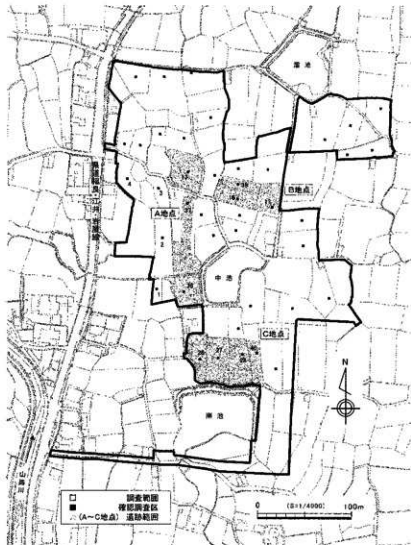


図8 調査区設定図(確認調査)

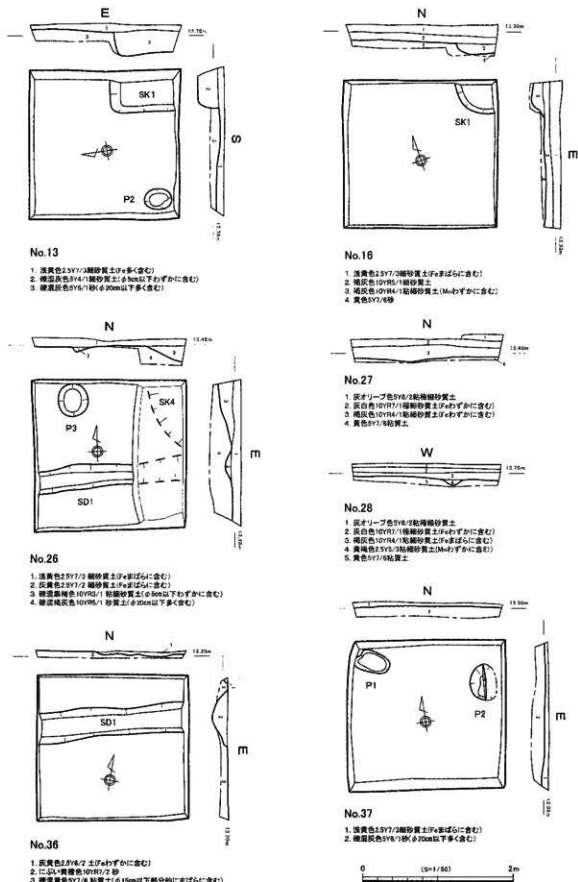


図9 確認調査区平面・層序図

遺物はSD1から土師器・陶磁器、P3から須恵器(2)、SK4から須恵器・土師器・製塩土器(3)が出土しており、前者が中・近世頃、後者が奈良・平安時代頃と思われる。

No.27・28調査区で耕作土下約10～13cmにある褐灰色粘細砂質土(3層)から須恵器(7)・土師器・製塩土器(4～6)など奈良・平安時代頃と思われる土器が比較的多く出土している。遺物量はNo.27調査区が多く、東に行くほど少なくなる傾向にある。

## 第2節 まとめ

本調査により、3ヶ所(A～C地点)で遺構または遺物包含層を確認することができた。出土遺物からA地点は中世前半と近世頃、B地点は中世前半頃、C地点は奈良・平安時代頃と中近世頃の時期を中心とする遺跡が想定される。

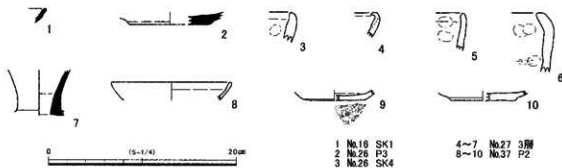


図10 確認調査区出土遺物



## 第4章 4次調査の成果

### 第1節 1区の調査

#### 1. 概要 (図11・12 写真図版3)

先の3次調査(確認調査)成果を受けて、地下の遺跡が破壊される部分3ヶ所(1~3区)について本発掘調査を行った。調査は重機・人力併用で進めていった。

1区は、調査地南部の南池西側に隣接する調査区である。規模は南北約6m、東西約26m、標高14.82mを測る。調査区内の土層堆積は、ベースとなる礫混明黄褐色2.5Y6/6土(9層)が東(南池)方向にむかって降ろしていき、落込み(SX1)を形成する。それ以外の遺構はない。

#### 2. 遺構と遺物

##### SX1 (図12・13 写真図版3・8)

南池(東)方向への落込みである。自然地形と考えられ、地形に沿って南東~北西方向に広がる状況が観察できる。深さ約1.0mを測り、埋上はオリーブ黄色5Y6/4細砂質土~礫混黒褐色2.5Y3/1土

(3~7層)の上層と礫混暗灰色N3/0粘細砂質土(8層)の下層に大別できる。特に下層は粘性が強く、涵水が著しい。遺物は須恵器(11・14~19)・土師器(12・13)・製塩土器(20~22)・黒色土器があり、11~13が上層、14~22が下層からの出土である。

11は東播系のこね鉢で口縁部は直線的に開き、端部を上方にわずかに拡張する。

12は皿で口縁部が短く水平方向に開き、高台は比較的高い。

13は甕で口縁端部が内湾ぎみに上方にのび、端部をわずかにつまみあげる。

14は坏B蓋で口縁端部を下方にわずかに折り曲げる。端部は短く、丸い。15は坏B身口縁部で端部がわずかに外反する。16・17は坏Bの底部で16の高台はや

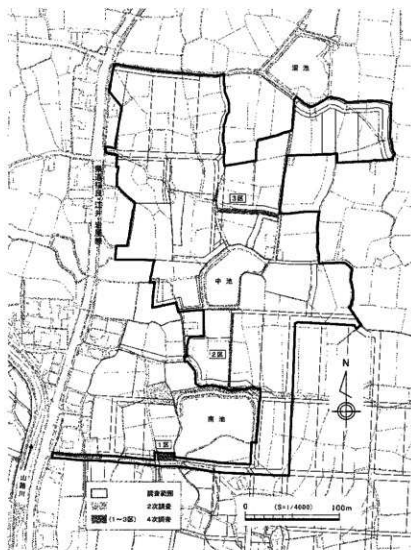
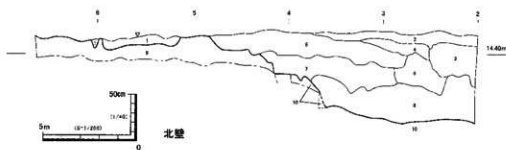


図11 調査区設定図(本発掘調査)



1. 灰黄褐色10YR5/2土
2. 浅黄色2.5Y7/4粘厚細砂質土(Feわずかに含む)
3. オリーブ黄色5Y6/4粘砂質土(Feわずかに含む)
4. 灰オリーブ色5Y6/2粘砂質土(Feわずかに含む)
5. 濃褐色10YR4/1粘砂質土(φ10cm以下わずかに含む)
6. 濃褐色灰色N3/0砂質土(φ20cm以下多く含む)
7. 濃褐色2.5Y3/1土(φ20cm以下わずかに含む)
8. 濃褐色灰色N3/0粘砂質土(φ40cm以下多く含む)
9. 濃明黄褐色2.5Y8/6土(φ10cm以下部分的にまばらに含む)
10. 濃黄褐色2.5Y5/4土(φ20cm以下多く含む)

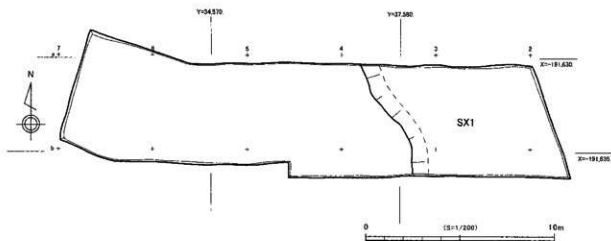
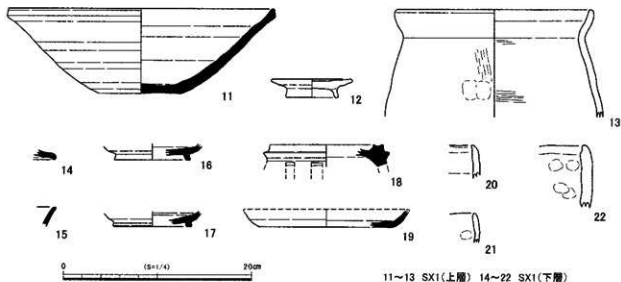


図12 1区平面・層序図

4次調査の成果



11~13 SX1(上层) 14~22 SX1(下层)

図13 1区出土遺物

や内側に付く。18は円面硯の縁部である。19は皿の底部で口縁端部を欠く。

20～22は口縁部で20・21の器壁の厚さは6～7mmを測り、胎土に粉殻を含む。

## 第2節 2区の調査

### 1. 概要 (図11・14・15 写真図版4・5)

南池から中池の間、南北77m、東西2.5mの調査区で、標高13.97～14.05mを測る。1a区の調査中に遺物が比較的多く出土したため、農業用水路を挟んで北側に調査区を拡張した(小地区名については一を付すことにした)。ベースとなる黄色5Y7/6粘質土(北部13層)・オリーブ灰色2.5GY5/1細砂質土(北部11層)は0a区の現代水路北側周辺から北(中池)方向にむかって傾斜しており、落込み(SX32)が形成される(第2遺構面)。また落込みがある程度埋没した段階で水田の畦畔(SX40)を壁面で確認した(第1遺構面)。遺構は調査区中央部を中心に奈良時代頃の掘立柱建物や土坑などが分布しているが、柱穴以外の遺構深度は約20cm以内と比較的浅く、遺構の削平が想定される。

### 2. 遺構と遺物

#### 平安時代

##### SX40 (図15・21 写真図版5・11)

SX32の上層で確認した水田の遺構である。SX32埋土上層である灰色N4/0粘質シルト(6層)・褐灰色10YR4/1粘極細砂質土層(7層)の上面が盛り上がる部分が2ヶ所壁面で認められた。その直上は、洪水砂と思われる礫混灰黄色2.5Y6/2砂(3層)～明黄褐色2.5Y6/6細砂(5層)で覆われる。2ヶ所の盛り上がる部分は水田の畦畔と思われ、基底幅幅50～60cm、高さ約15～20cmを測る。2ヶ所の畦畔の間隔は内法で10.4～11.0mを測る。

遺物は非常に少ないが、3・4層から土師器(82)が出土している。器種は坏又は碗の底部と思われ、底部外面がへら切りである。

#### 奈良時代

##### SB1 (図14・16・18 写真図版4・5・8)

調査区中央部に位置する掘立柱建物である。南北の柱列のみの確認で西・北側に広がると思われる。規模は南北2間(4.26m)以上で柱間が2.05～2.2mとなる。柱穴の平面形は楕円形で、P16は長辺約80cm、短辺約50cm、P4・16で深さ約50cmを測る。P4には太さ約10cmの柱材が残存していた。P4-16を基準とした方位はN11°Wを示す。遺物は須恵器(23・24)・製塩土器(25～27)が出土している。

23はP4とP16出土の資料が接合できた。坏B蓋の口縁部で、天井部はほぼ平らとなり端部は短く下方に折り曲げる。24は坏Aで底部と体部の境は不明瞭で丸くなる。

25・26は口縁部で内湾し端部は尖りぎみとなる。27はP16からの出土で、同一個体と考えられる口縁部と底部である。底部は尖りぎみの丸底となる。いずれも内外面は指押え後ナデで器壁の厚さが7mm前後を測り、胎土に粉殻を含む。これらを復元すれば砲弾形の丸底Ⅳa式になるとと思われる。

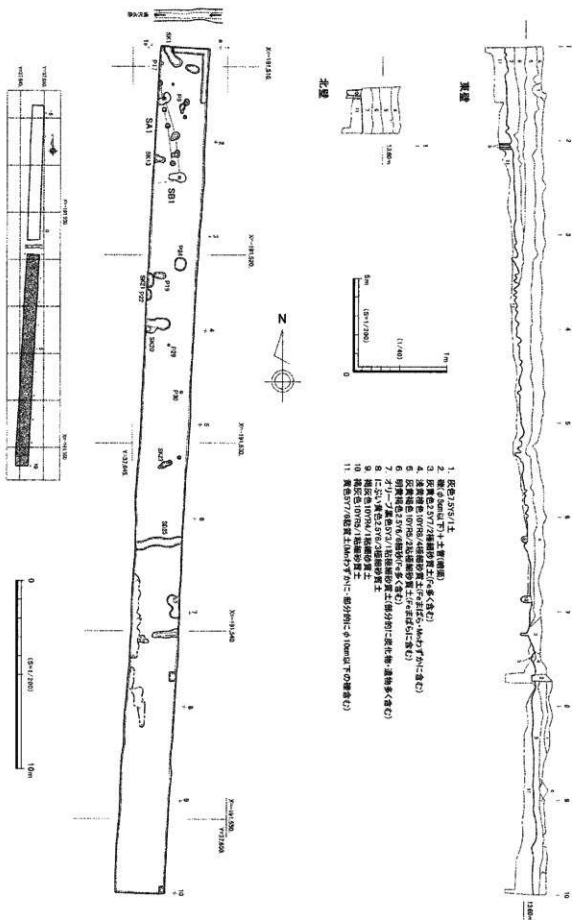
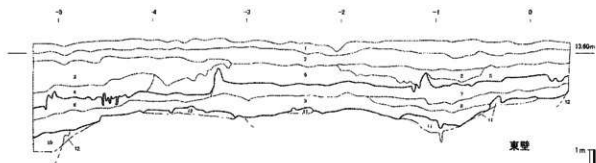
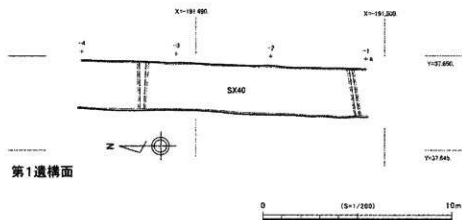


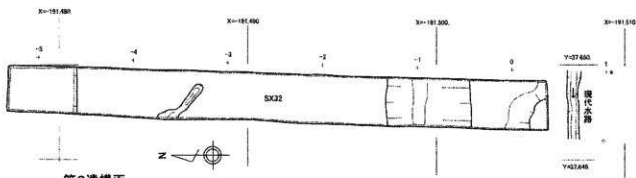
図 14 2区平面・層序図1 (南部)



1. 淡黄褐色10YR6/4粘結砂質土(Feまばら・Mnわずかに含む)
2. 灰黄褐色10YR5/2粘結細砂質土(Feまばらに含む)
3. 暗褐色灰黄色2.5Y6/2砂(φ 5mm以下多含む)
4. 暗褐色オリーブ黄色5Y6/3砂(φ 5mm以下まばらに・Fe多く含む)
5. 淡黄褐色2.5Y6/3細砂
6. 灰色8N/0粘質シルト(Feまばらに含む)
7. 褐色10YR4/1粘結細砂質土(Feまばらに含む)
8. オリーブ褐色5Y3/1粘質シルト(部分的に炭化物多く含む)
9. 暗灰色N4/0粘質シルト(Fe多く含む)
10. 灰色N6/0粘質シルト(Feまばらに含む)
11. オリーブ灰色2.5Y6/1粘砂質土(Feまばらに含む)
12. 黄色5Y7/6砂質土(Mnわずかに含む)
13. 黄色5Y7/6粘質土(Mnわずかに含む)



第1遺構面



第2遺構面

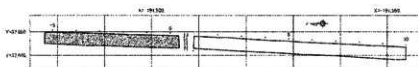


図 15 2区平面・層序図2 (北部)

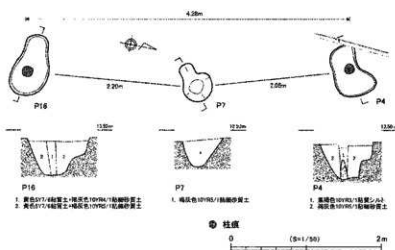


図16 2区SB1平面・層序図

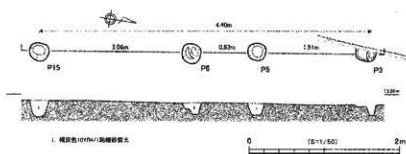


図17 2区SA1平面・層序・断面図

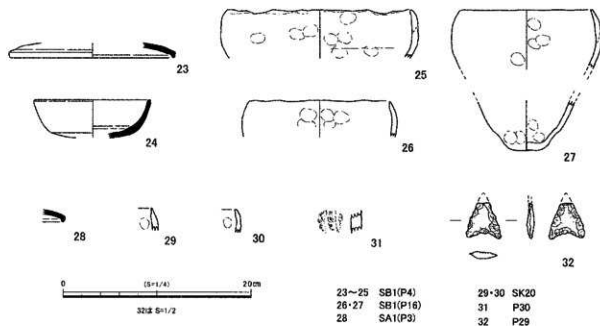


図18 2区出土遺物1

### SA1 (図14・17・18 写真図版4・8)

調査区中央部に位置する櫛列又は柱列状の遺構である。規模は南北4.4mで柱穴の間隔は0.83～2.06mと不規則になる。平面形は直径24～27cmの円形をなし、深さ15～22cmを測る。P3-15を基準とした方位はN9°Wを示す。先のSB1に隣接すると共に平行することから、SB1の足場穴になる可能性がある。

遺物は須恵器(28)や製塩土器が出土しているが、図化できるものは1点のみである。坏蓋の口縁部で端部はやや内側に折り曲げる。P3からの出土である。製塩土器は、P5・6・15からも出土しており、SB1から出土しているものと同じ丸底IVa式体部の資料と思われる。

### SK20 (図14・18 写真図版5・8)

調査区中央部3a～4a区に位置する土坑で西側に続く。最大幅72cm、深さ10～18cmを測る。遺物は製塩土器(29・30)が出土している。口縁部で端部が尖りぎみとなり、器壁は29が6mm、30が5mmを測り、胎土に初殻を含む。丸底IVa式口縁部の資料と思われる。

その他に製塩土器が出土している遺構にP9・17・19・22、SK13・23、SD25があり、埋土の色調などからSK20と同時代の遺構と思われる。

### SX32 (図15・19・20 写真図版4・5・8～10)

調査区北半部SB1の北側で確認した中池(北)方向への落込みである。落込み内は凹凸があり、深さは深い部分で45cmを測る。埋土は、上層が灰色N4/0粘質シルト・褐灰色10YR4/1粘極細砂質土(6・7層)、中層が黒色5Y3/1オリブ粘質シルト(8層)、下層が暗灰色N3/0粘質シルト(9層)の3層に大別できる。遺物は比較的多く、須恵器(33～56・71～74)・土師器(57～66・75)・製塩土器(67～70)・羽口(76・77)が出土している。

33～35・38～40・71は坏Bの蓋である。33は口縁端部がS字状に屈曲する。7層(上層)からの出土である。38は大井部が笠形で器高が高く、つまみは扁平で中央が窪む。37は坏Hの蓋で口縁部が緩やかに開き、端部が丸い。41～47・72は坏B身である。41～43・72の口縁部は外側に開き、器壁が比較的厚い。44の口縁部は上方にのびる。72の高台は端部が外側に膨らむ。48・49は坏Aで底部と体部の境はやや丸みをおびる。50は口縁部で短く「く」の字状に屈曲して、斜め上方に開く。端部が左右にわずかにふくらむ。横瓶の口縁部の可能性がある。51は甕の体部で肩部は丸く、中央部に穿孔がある。36・52～55・73・74は長頸甕で52が口縁部、53が口縁～頸部、54・73が体部、36・55・74は底部である。最低3個体分はあると思われる。52・53口縁部の中央と54体部と肩部の境に回線が一条巡る。54の肩部は丸みがあるが、73は稜を持つ。56は横瓶である。口縁部は上方にのびて端部が外側に屈曲する。肩部はわずかに稜を持ち体部の内外面は縦方向のナデが施される。

57は碗の口縁部で底部から丸く上方にのびて端部が丸い。口縁部の内・外面にヘラミガキ、体部外面はヘラ削りが施される。58は坏の口縁部で内湾しながら立ち上がり、端部は内側が肥厚する。59は皿で口縁部は丸く斜めに開く。口縁端部は丸く、内面は辻線状に窪む。58・59は比較的細かな胎土である。60～64・75は甕の口縁部である。60・61・75の端部は丸く、62・63は面を持ち、64は短く外反する。61の体部外面は横方向のタキ後ハゲが施される。64は3mm以下の砂粒を多く含む。65・66は移動式の甕である。65は底部分、66は側面部分と思われ、底は長さ約9cmで斜め上方にのびる。

67・68は口縁部、69・70は底部である。口縁端部は面を持つ67と尖りぎみの68がある。底部は尖りぎみの丸底でいずれも内外面は指押え後ナデ。口縁部の器壁の厚さは6～7mmを測り、胎土に初殻

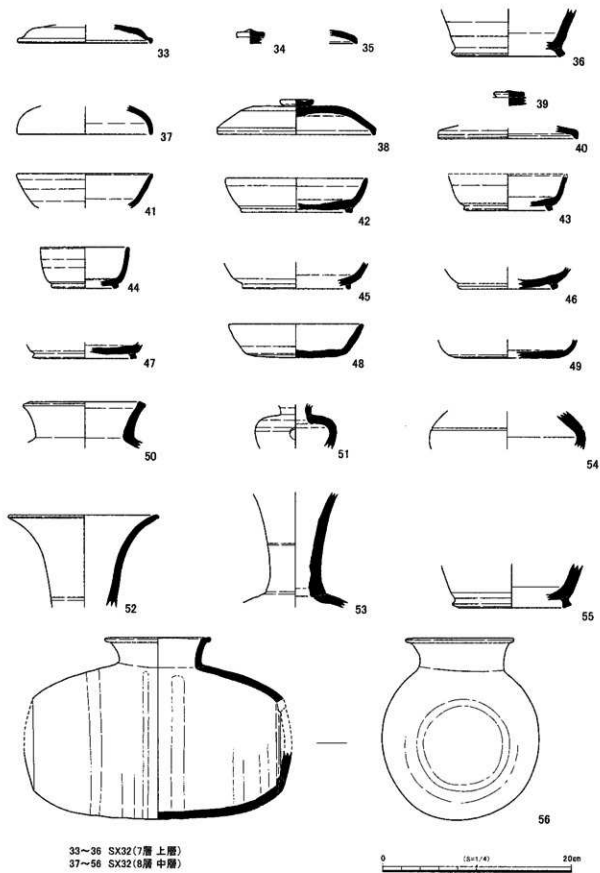
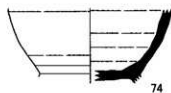
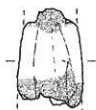
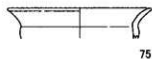
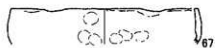
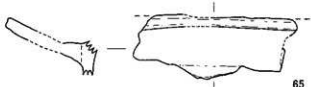
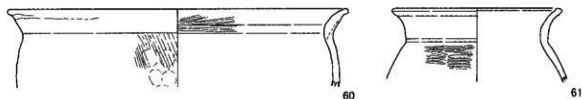
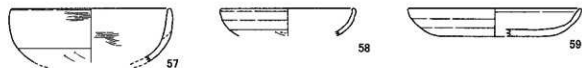


図19 2区出土遺物2





57~70 SX32(8層 中層)  
71~77 SX32(9層 下層)

图 20 2区出土遺物3

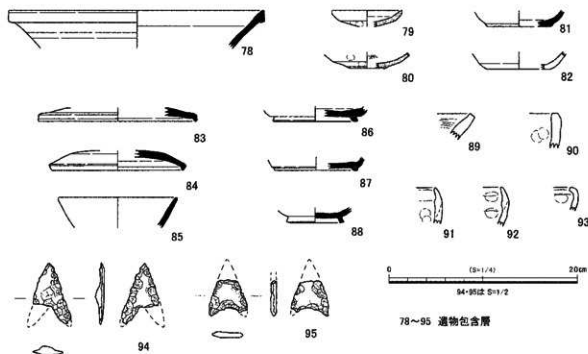


図 21 2区出土遺物4

を含む。

76・77は輪の羽口である。76は最大幅7cm、断面形が楕円形をなす。二次旋成を受けており、両端はガラス質になる。

#### 縄文時代

P 29・30 (図 14・18 写真図版 8・11)

調査区中央部4a区に位置する小穴である。遺物が少なく小片であるため、奈良時代の遺構の可能性もあるが、周辺の調査で縄文時代の遺物が出土しているため、縄文時代の遺構の可能性が高いと思われる。規模はP 29が直径6～9cm、深さ4cm、P 30が直径10cm、深さ6cmの遺構である。SK 1やP 24も縄文時代の遺構と思われる。

遺物はP 29からは石器 (32)、P 30からは縄文土器 (31) が出土している。32はサヌカイト製の凹基式石鏃で先端部が欠損する。31は体部片で外面に沈線で円弧状の文様が施される。

#### 遺物包含層出土遺物 (図 21 写真図版 11)

遺物包含層からは縄文・奈良・平安時代、中世の遺物が出土している。

中世の遺物には、須恵器 (78) や瓦器 (79・80) がある。78は東播系こね鉢口縁部で端部を上下に拡張する。79は小皿、80は埴の底部で小さな高台が付く。

平安時代の遺物には、須恵器 (81) と土師器 (82) の坏A又は埴と思われる底部がある。底部外面はヘラ切りで81はやや平高台ぞみとなる。

奈良時代の遺物には、須恵器 (83～88)・土師器 (89)・製塩土器 (90～93) がある。83・84は坏B蓋の口縁部、85は身の口縁部、86・87は底部である。88は底径が5.1cmと小さいことから、小形の器種になる可能性がある。89は甕の口縁部で端部は面を持ち中央がわずかに窪む。内面は横方向のハケである。製塩土器には器壁が1cmとやや厚いもの90と6～8mmと薄いもの91～93があり、

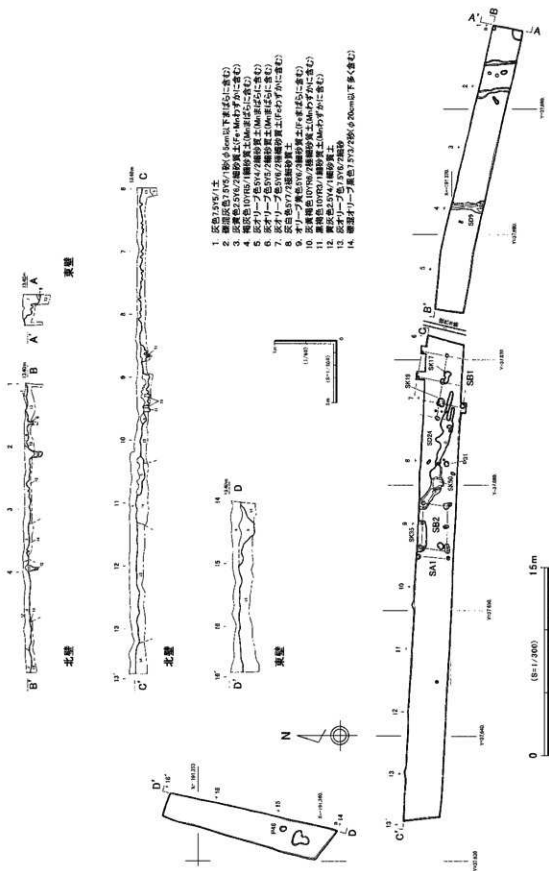


図 22 3区平面・層序図

いずれも胎土に初柄を含む。

縄文時代と思われる遺物には、石器(94・95)がある。いずれもサヌカイト製の凹基式石鏃で94は挟りが深い。

### 第3節 3区の調査

#### 1. 概要(図11・22 写真図版6・7)

中池の北側に位置する幅2.5～3.0mの逆L字状の調査区で標高13.52～13.63mを測る。本地区のベースは、灰オリーブ色7.5Y6/2細砂(13層)～雑混オリーブ黒色7.5Y3/2砂(14層)で、ほぼ水平に堆積する。遺構分布は少ない傾向にあるが、調査区中央部の6a～9a区を中心に掘立柱建物2棟・柱列・土坑・溝・小穴を確認した。

#### 2. 遺構と遺物

##### 中世

#### SB1(図22・24・27 写真図版7・11)

調査区中央部に位置する掘立柱建物である。規模は全体が把握できないが、南北2間(約3.9m)以上、東西3間(5.05m)以上で柱間は1.15～2.08mを測る。西側1間分の柱間は1.15mと短い。P21-30を基準とした方位はN6°Eを示す。P21がSK19に切られる。

遺物は土師器(96)・瓦器(97)が出土している。96は皿の底部と思われ、外面は回転糸切りである。97は埴で口縁部内面が横方向のミガキ、体部外面には指オサエが残る。

#### SK19(図22・23・27 写真図版7・11)

調査区中央部6a～7a区に位置する土坑で、SB1のP21を切る。規模は1辺58cm、深さ12cmで歪んだ方形をなす。SK17も埋土から同時期の遺構と考えられる。

遺物は瓦器(102)が1点出土している。完形の小皿で内面はヘラミガキ、底部外面は指オサエである。

#### SK35(図22・27 写真図版11)

調査区中央部8a～9a区に位置する土坑で北側にのびる。規模は幅2.5m、深さ5～9cmを測る。遺物は平安時代の須恵器(101)に混じって、中世の瓦器(100)が出土した。100は埴の口縁部で体部外面には指オサエが残る。101は底部で外面回転ヘラ切りである。

#### SD9(図22・27 写真図版7・11)

調査区東部3a～4a区に位置する南北方向の溝である。規模は幅0.45～1.0m、深さ17～21cmである。遺物は瓦器(98)が出土している。埴の口縁部で、体部外面には指オサエが残る。

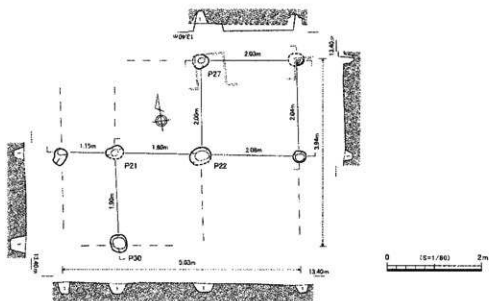
#### SD24(図22・25・27 写真図版11)

調査区中央部6a～8a区に位置する東西方向の溝状の遺構である。乱れた形状で幅は一定でなく、広い部分で約1.0m、深さ約7cmと非常に浅い。平安時代のSK50を削平していると考えられる。



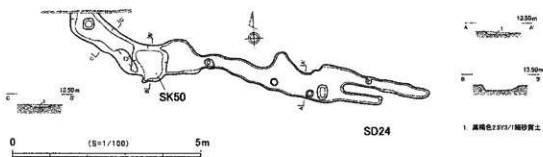
図23 3区SK19  
平面・層序・断面図

4次調査の成果



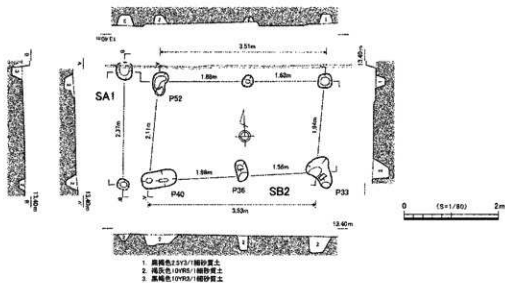
1. 黒褐色2SV3/細砂質土

図24 3区SB1平面・層序・断面図



1. 黒褐色2SV3/細砂質土

図25 3区SD24・SK50平面・層序・断面図



1. 黒褐色2SV3/細砂質土  
2. 褐色10VR5/細砂質土  
3. 黒褐色10VR3/細砂質土

図26 3区SB2・SA1平面・層序図

遺物は土師器(104・105)・黒色土器(106)など平安時代の土器に混じって瓦器(107)が出土している。104・105は底部でいずれも外面はヘラ切りで前者は平高台となる。106は内黒の埴底部でやや高めの高台が付く。107は埴の体部と思われ、外面には指オサエが残る。

**P 31** (図 22・27 写真図版 11)

調査区中央部 7 a ~ 8 a 区 SD 24 の南に位置する小穴である。規模は長辺 42 cm、短辺 34 cm、深さ 7 cm を測る。遺物は土師器(103)が出土している。中世の皿の底部と思われる。

**P 46** (図 22・27 写真図版 11)

調査区西部 14 a 区に位置する小穴である。規模は長辺 54 cm、短辺 47 cm、深さ 25 cm を測る。

遺物は須恵器(99)が出土している。埴又は皿の底部で外面は回転糸切りである。

**平安時代**

**SB2・SA1** (図 22・26・27 写真図版 11)

調査区中央部に位置する掘立柱建物で、南北方向に広がる可能性がある。規模は南北1間(1.94 ~ 2.11 m)以上、東西2間(3.51 ~ 3.53 m)を測る。柱間は1.55 ~ 2.11 mで東側の柱間は西側より

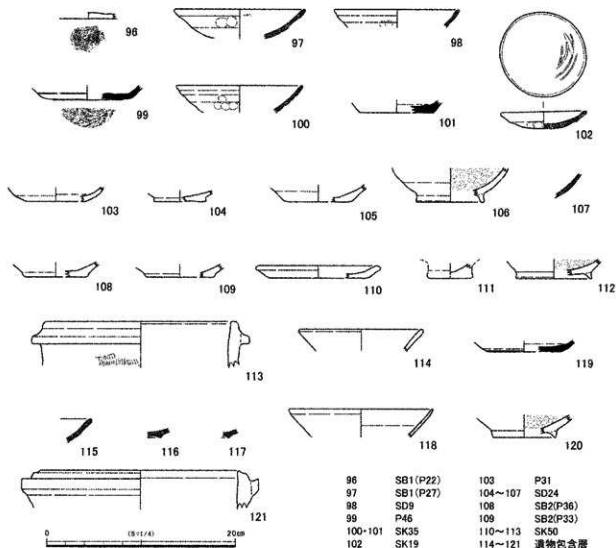


図 27 3区出土遺物

若干短い。P 40-52を基準とした方位はN 6° Eを示すが、建物自体の歪みのため方位は南北方向に近い。建物西側には30～40 cm離れてSA 1があり、付属施設の可能性がある。

遺物は柱穴から土師器(108・109)が出土している。いずれも坏又は埴と思われる底部で外面は回転ヘラ切りである。

#### SK 50 (図 22・25・27 写真図版 7・11)

調査区中央部SD 24の下層で確認した土坑で、SB 2(建物)の約1 m東に位置する。深さ約14 cmを測り、SD 24より一段深くなる。

遺物は土師器(110・111・113)・黒色土器(112)が出土している。110は皿で口縁部は短く斜め上方にのび、端部は丸くわずかに外側に膨らむ。111は底部で平高台となる。いずれも底部外面はヘラ切りである。112は内黒の埴底部で断面三角形の高台が付く。113は羽釜の口縁部で短めの鐔が端部付近に付く。体部外面は縦方向のハケである。

#### 遺物包含層出土遺物 (図 27 写真図版 11)

調査区中央部の4層を中心に平安時代～中世の遺物が出土している。

中世の遺物には、土師器(114)・瓦器(115～117)・白磁(118)がある。114は皿の口縁部で斜め上方に開き、端部が丸い。115は埴の口縁部、116・117は埴の底部である。底部は断面三角形の小さな高台が付く。118は碗の口縁部で端部が尖り、内外面の色調は灰白色をなす。

平安時代の遺物には、須恵器(119)、黒色土器(120)、土師器(121)がある。119は底部で外面はヘラ切りである。120は内黒の埴底部で断面三角形の輪高台が付く。121は羽釜の口縁部で短めの鐔が端部付近に付き、端部の内側が尖る。

## 第5章 総括

### 第1節 縄文時代

本調査により、縄文・奈良・平安時代・中世の遺構や遺物を確認することができた。調査区幅が狭いため全容を把握できていないが、時代ごとに見ていくことにする。

縄文時代は非常に少なく、2区でP 24・29・30やSK 1を確認している。遺物は小片であるが縄文土器 31 や石礫 32 が出土しており、縄文時代後期頃の遺物と思われる。5・6次調査においても縄文土器が出土する地区があり<sup>11)</sup>、遺跡の始まりは縄文時代に求められる。

### 第2節 奈良時代

本遺跡の中心となる時期で、1・2区で遺構・遺物が確認できた。

1区では南池に隣接してSX 1を確認した。遺物はあまり多くないが、下層より奈良時代頃の遺物が出土している。遺物の中に円面硯 18 が含まれるのが注意される。

2区ではSB 1の他SA 1、SX 32、SK 13・20・21・23、SD 25、P 9・17・19・22などが奈良時代の遺構と考えられる。1～3次調査の成果を参考にすると南池北～西側に遺構の広がりが想定され、官衙的な性格を帯びた遺跡も考慮にいれる必要がある<sup>註2)</sup>。SB 1とSX 32を除いた遺構からの遺物が全体的に少ないために、すべての詳細な年代は今後の課題であるが、奈良時代の中でも前半期が中心になるとと思われる。

ここでは2区のSB 1北側で確認したSX 32から出土した遺物

を中心に見ていきたいと思う。出土遺物には、須恵器・土師器・製塩土器などがあり、建物周辺で使用されたものが廃棄されたと考えられる。さらに器種が比較的豊富なことが特徴としてあげられる。その

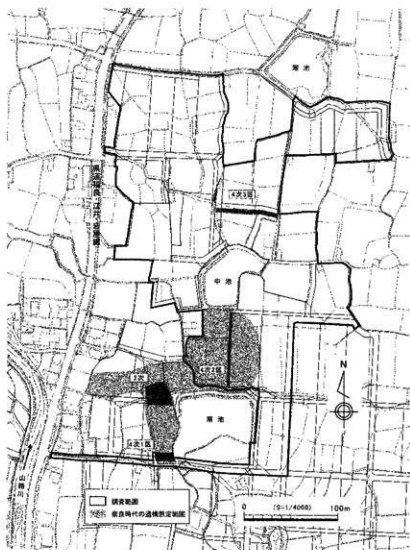


図 28 奈良時代の遺構想定範囲



中から須恵器を中心に島内外の遺跡と比較していきたい。

島内各遺跡の供膳具の法量や法量の変化は表2・図29の通りである<sup>註31</sup>。坏B蓋38は、口径16.4cm、器高3.7cmで、天井部が笠形で回転ヘラ削りが施される。径口指数が22.56と比較的高い。島内の他の遺跡と比較してみると、口径から大(18cm前後)、中(14~16cm前後)、小(12~14cm)の3種類に分類が可能で、本資料は口径16cm前後の中型に属する資料と思われる。島内の遺跡の法量分布図などからは明瞭ではないが、平城京(宮)など都城周辺<sup>註4</sup>や播磨地域の窯跡<sup>註5</sup>出土資料を参考にすれば、時期が新しくなるにつれ器高が低くなる傾向がある(図30)。他の40・71の口縁端部は平らでわずかに窪む程度であり、新宮窯跡(洲本市)や奥の池窯跡(洲本市)のS字状の口縁端部よりも志筑廃寺(淡路市)SX4204や平城I期の資料に近い。

坏B身は、今後細分も視野にいれなければならないが、坏B蓋同様島内の資料から、口径より大(17cm前後)、中(12~15cm)、小(10cm前後)の3種類程度に分類でき、44は小型、41・42・43・72は中型に属する資料と思われる。口縁部はやや開きぎみに立ち上がる。44は口縁部の傾きが少なくやや箱形をなす。調整技法については、底部外面の回転ヘラ切りがナデ消されており、全体的に器壁が厚い。島内の遺跡では資料数が少なく分りにくいが、先の島外の資料では口縁部がやや開きぎみであったものが、平城II・III期にかけて傾きが少なくなり箱形を呈するようになり、その後再び口縁部の傾きが大きく、器高が低くなる傾向がある。一方奈良時代後半の播磨地域の窯跡である投松6号窯・中谷1号窯(加古川市)の径高指数は高く、地域性が反映された結果と考えられる<sup>註6</sup>。口縁部の傾きを示す外傾係数は中層資料の平均値が2.37、下層資料が2.21となり、平城II・III期や中谷4号窯に近い値を示す(図30)。

坏A48は、口径14.0cm、器高3.6cm、底径9.7cmとなる。都城周辺や播磨地域の窯跡資料を参考にすれば、基本的に年代が新しくなるにつれ器高が低く口縁部の傾きが大きくなり、底部から体部の立ち上がり丸いものから直線的なものへの変化が想定される。坏A48は、径高指数25.71、外傾係数1.67で角床窯跡IIや奥の池窯跡の数値に近いものの底部から体部がやや丸みがあり、志筑廃寺と角床窯跡IIの間に位置すると思われる。

これら遺物の特徴から2区SX32の中層資料について、現段階では8世紀第2四半期(平城III期)頃を下限にすると思われる。また下層の坏B身72はやや高めの高台が内側に付くことから、わずかに先行し、2区SB1を含めて平城I~II期頃の時期が想定される。建物廃絶後にSX32内に遺物の廃棄が行われ、上層から出土した須恵器坏蓋33から奈良時代の末にかけて埋没が進み、浅い谷地形となっていたと考えられる。

さらに本遺跡で、特徴的な遺物に製塩土器をあげることができる。完形に復元できるものはないが、2区SB1から出土した製塩土器27などを参考にすれば、口径約14~20cm、口縁部がやや内湾し底部が尖底ぎみとなる砲弾形に復元され、淡路島の土器編年では丸底IV式<sup>註7</sup>に位置付けられよう。ただし、器壁が約1cm以下と比較的薄く、胎上に粗殻を含むのが特徴で、谷町筋遺跡(志知町)<sup>註8</sup>・後山遺跡(松帆西路)<sup>註9</sup>・淡路国分寺跡(八木園分)<sup>註10</sup>などから出土している器壁が約1cm以上のものとは細分が可能であろう。ここでは前者の器壁が薄いものを丸底IVa式、後者の器壁が厚いものをIVb式とする。大野遺跡の対岸にある岸ノ上遺跡3区から、器壁が薄いIVa式と同様な製塩土器がややまとまって出土している<sup>註11</sup>。年代的には大野遺跡と同時期の奈良時代前半期頃を中心にしており、胎土に粗殻を含むものは山路川や大日川中流域に多く、地域的なまとまりが認められ、今後の検討課題といえる。

遺跡名	出土地点		番号	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	径高 指数	外傾 係数	備考	時期	
	地区	遺構・土層										
志成寺寺		SX4204	57	坏日蓋	16.2	2.9						平城1・Ⅱ (8世紀第1田平期)
			58	坏日蓋	19.2	3.2			17.58			
			59	坏日蓋	14.8	3.1			20.95			
				平均値	16.07	3.07			19.20			
			64	坏日身	13.9	4.1	10.4		29.71	2.41		
			65	坏日身	14.6	4.3	9.8		29.56	1.79		
				平均値	14.2	4.2	10.1		29.58	2.10		
			60	杯A	12.0	3.5	9.4		29.17	2.69		
			61	杯A	12.6	4.1	9.7		32.54	2.83		
			62	杯A	12.6	4.1	9.5		32.54	2.65		
			63	杯A	13.6	3.8	9.6		27.91	2.11		
				平均値	12.70	3.88	9.63		30.55	2.57		
			角床窯址Ⅰ			2	坏日蓋	13.2	2.9			
5	坏日身	12.6				4.2			32.81	2.33		
7	坏日身	14.6				3.8			27.11	1.65		
8	坏日身	13.9				3.9			30.47	1.96		
	平均値	13.29				3.97	8.80		30.14	1.85		
角床窯址Ⅱ			4	杯A	13.6	3.3		25.38	1.74		8世紀後半	
新宮遗址			7	坏日身	13.2	4.3		32.58	2.05	底部外面未調査		8世紀後半
			1	坏日蓋	13.6	2.4			17.65		口縁部が半吹	
幾の池遗址			2	坏日蓋	12.4	2.2			17.74		口縁部が半吹	8世紀末
				平均値	13.00	2.30			17.70			
			6	坏日身	14.6	3.3			24.63	1.38		
			7	坏日身	16.2	3.4			25.76	2.00		
			10	坏日身	15.2	5.2			30.23	1.73		
				平均値	14.60	3.97	9.87		26.87	1.70		
			8	杯A	12.6	3.9			30.47	1.70		
			9	杯A	12.6	3.7			29.60	1.72	底面～体部内面への割り	
				平均値	12.65	3.80	8.20		30.04	1.71		
			人野遺跡	2区	SX32 (中層)	38	坏日蓋	13.6	3.7			
42	坏日身	13.6				3.6			21.49	2.18		
43	坏日身	13.6				3.7			31.45	2.00		
44	坏日身	14.2				4.4			47.83	2.93		
	平均値	13.4				3.97			34.59	2.37		
SX32 (下層)	72	坏日身				15.7	3.1			24.41	2.21	
SX32 (中層)	48	杯A	13.6	3.6			25.71	1.67				

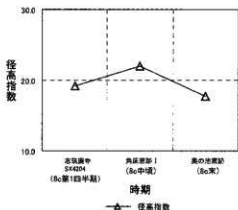
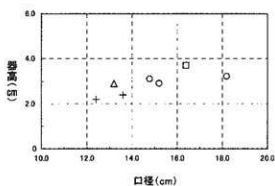
表2 奈良時代の須恵器の度量（淡路島内）

### 第3節 平安時代

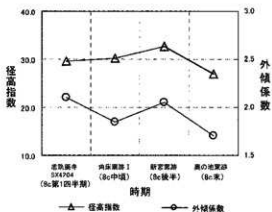
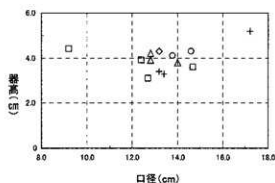
平安時代は1～3区で遺構又は遺物を確認した。

1区では、SX1の上層から中世の遺物に混じて平安時代の遺物が出土している。土師器皿12の底部外面が回転ヘラ切りで、高台がやや高いのが特徴である。同様な資料が徳島市内の遺跡でも確認されており、10世紀頃の年代が与えられている<sup>註129</sup>。

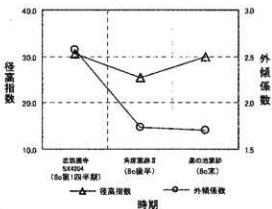
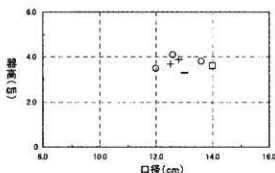
2区では水田に関連すると思われる畦畔(SX40)を断面で確認している。中池南側は、奈良時代末以降、埋没が進んだ谷地形が広がることから自然地形を利用して水田が営まれていたものと推測される。出土遺物が少なく時期決定が困難であるが、水田を覆う土層から出土した土師器82の底部がヘラ切りと思われるため、10世紀頃に洪水で埋没したと想定される。



### 杯B蓋



### 杯B身

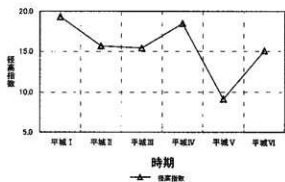


### 杯A

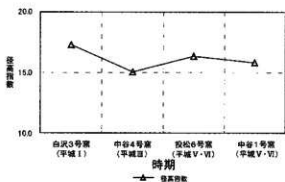
図 29 須恵器の法量分布と径高指数・外傾係数の変化(淡路島内)

3区では、掘立柱建物1棟や土坑などを確認した。調査区幅が狭いため詳細は不明であるが、SB2・SA1とSK50が該当し、関連する遺構と思われる。

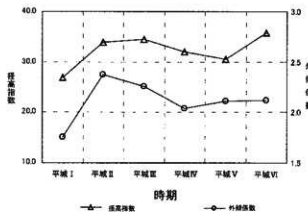
遺物は、3区からの出土量が多く、土師器・須恵器・黒色土器があるが、遺存状態が良好なものは少ない。土師器・須恵器は杯Aまたは壺と思われる底部の資料が中心で、底部外面はいずれも回転ヘラ切りである。須恵器には奈良時代以降の杯B蓋や身が認められない。土師器には器高の低い皿110を含み、底部は平高台となる104・111がある。



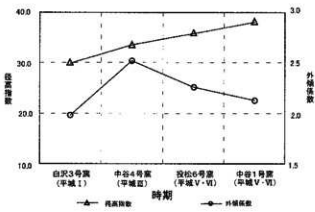
坏B蓋(都城周辺)



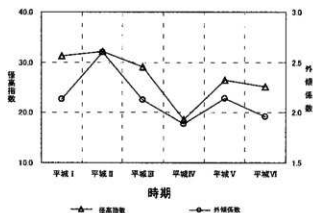
坏B蓋(播磨地域)



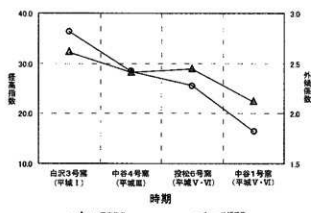
坏B身(都城周辺)



坏B身(播磨地域)



坏A(都城周辺)



坏A(播磨地域)

図30 須恵器の径高指数・外傾係数の変化(都城周辺と播磨地域)

煮炊き具 113・121は、口縁部外面上方に短めに鑄が付く羽釜タイプで、摂津C型羽釜に分類される。摂津地域では10世紀に出現し、11世紀中には姿を消すとされる<sup>註13)</sup>。

黒色土器 106・112・120は、すべて内黒で輪高台を貼り付けたタイプで、畿内系Ⅲ類に分類されると思われる<sup>註14)</sup>。

以上出土遺物の特徴からSB2・SA1とSK50の遺構は、10世紀頃を中心とする時期を考えておきたい。

## 第4節 中世

中世は1区と3区で遺構・遺物を確認した。

1区はSX1の上層より須恵器こね鉢**1**が出土していることから、中世には埋没が進み窪地状をなしていたものと思われる。

こね鉢**11**は東播系に分類されるもので、口縁部の外反が弱く、端部の肥厚が少ない特徴を持つB1-II類に分類され<sup>(注16)</sup>、時期的には12世紀末～13世紀初頭に位置付けされる。口縁部が水平に開き、高台が高い特徴を持つ土師器皿**12**についても同じ時期と考えられる。

3区では、掘立柱建物1棟や土坑・溝などを確認した。すべての遺構の時期は明確にできないが、最低2時期は想定される。遺構の切り合いや埋土からSB1、SD9・24、P31、SK35(I期)→SK17・19(II期)への変化がおえる。前者(1期)の遺構の内SD24がSB1の内部に入り込む形で位置することから、前後関係があると思われるが、切り合いは確認できず、詳細は今後の調査課題としたい。

遺物は、3区からの出土量が多く、土師器・瓦器・須恵器などがあるが、遺存状況が良好なものは少ない。

瓦器には、塊と小皿があり、いずれも和泉型に分類されると考えられる。遺構から出土した塊**97・98・100**は、口径が13.7cm、13.0cm、13.2cmに復元でき、内面のヘラミガキは摩滅のために観察できない。遺物包含層から出土した底部**116・117**には、断面逆三角形のやや退化した高台が付き、IV-1期頃と思われる<sup>(注16)</sup>。

土師器・須恵器については、わずかに出土しているが、全体の形状が復元できるものはなく、調整がわかる**96・99**は底部外面回転糸切りである。口縁部が残る**114**は端部が丸い。時期的には瓦器と同様な時期に属すると思われる。

輸入陶磁器には、遺物包含層から出土した碗**118**があり、12世紀後半に増加する白磁椀**V2**類に分類されるとされる<sup>(注17)</sup>。

以上遺物の特徴から、3区中世の遺構については、13世紀中頃～後半を中心とする時期で、I期からII期への変遷があったと思われる。

### 【註】

註1 『大野遺跡-5次調査-』『南あわじ市埋蔵文化財調査年報V』南あわじ市教育委員会2012、『大野遺跡-6次調査-』『南あわじ市埋蔵文化財調査年報VI』2013

註2 『大野遺跡-2次調査-』『南あわじ市埋蔵文化財調査年報IV』2011

註3 『志筑廃寺1』津名町教育委員会2004、浦上雅史『淡路島の古窯址出土の須恵器について』『淡路地方史研究会』1980 添付図面から計測の上作成。また表中にある径高指数は、器高÷口径×100、外傾係数は、器高÷(口径-底径)÷2で求められる数値。外傾係数が1の時、体部の傾きは45°を示す。

註4 『古代の上器1-都城の上器集-』古代の上器研究会1992 添付図面を計測の上作図(平城Iは下道西側溝SD1900A、平城IIは平城京左京一条三坊十五坪SD485、平城IIIは平城宮SK820、平城IVは平城宮SK219、平城Vは平城京左京八条三坊六坪SE200、平城VIは長岡宮北辺宮御城SD19605資料)

註5 『白沢3・5号窯』兵庫県教育委員会1999、『志方窯跡群-中谷文群-』兵庫県教育委員会2000、『志方窯跡群-投松文

群-』兵庫県教育委員会 2001 掲載（灰原資料）の因而及び出土遺物一覧表より作成

- 註6 『志方窯跡群-投松文群-』兵庫県教育委員会 2001
- 註7 『淡路島の古墳時代』淡路文化史料館 1993
- 註8 『谷町館遺跡』兵庫県教育委員会 1990
- 註9 『後山遺跡』『三原郡埋蔵文化財発掘調査年報1』三原郡広域事務組合 2001
- 註10 『淡路国分寺跡-17 次調査-』『南あわじ市埋蔵文化財調査年報IV』南あわじ市教育委員会 2011
- 註11 『岸ノ上遺跡-3 次調査-』『南あわじ市埋蔵文化財調査年報IV』南あわじ市教育委員会 2011
- 註12 勝浦康守「徳島県における古代末から中世の土器様相について」『中近世土器の基礎研究VII』日本中世土器研究会 1992
- 註13 福島正和「古代末から中世初頭の煮炊具」『中世土器の基礎研究21』中世土器研究会 2007
- 註14 「黒色土器」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会 1995
- 註15 『第33回中世土器研究会 東播系須恵器（2）-編年と分布から考える-』中世土器研究会 2014
- 註16 「瓦器概観」『中世の土器・陶磁器』中世土器研究会 1995
- 註17 「貿易陶器」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会 1995

番号	種別	器種	出土地点		口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	特徴・技法	押印	図版	
			地区	遺構・土層							
1	瓦器	甕 (I) (緑部)	3a-16	S81		(1.3)		口縁部欠い。	10	8	
2	取巻器 (底面)		5a-26	P9		(1.2)	取巻	厚縁のため器壁不明。	10	8	
3	製塩土器	丸底IV式 (I) (緑部)	5a-28	S84		(3.2)		厚さ 1.1 cm。粉縁含む。	10	8	
4	製塩土器	丸底IV式 (I) (緑部)	5a-27	焼灰色 10YR5/1 粘砂質土 (3層)		(2.6)		厚さ 6~7 mm。粉縁含む。	10	8	
5	製塩土器	丸底IV式 (I) (緑部)	5a-27	焼灰色 10YR5/1 粘砂質土 (3層)		(4.0)		厚さ 6~7 mm。粉縁含む。	10	8	
6	製塩土器	丸底IV式 (I) (緑部)	5a-27	焼灰色 10YR5/1 粘砂質土 (3層)		(6.2)		厚さ 8 mm~1.1 cm。粉縁含む。	10	8	
7	灰皿器	釜 (口縁~底面)	5a-27	焼灰色 10YR5/1 粘砂質土 (3層)		(4.8)		口縁径 4.8 cm。	10	8	
8	土師器	甕 (I) (緑部)	5a-37	P2		(1.9)		口縁部欠い。	10	8	
9	土師器	甕 (底面)	5a-37	P2		(1.1)		底面外面同軸状。	10	8	
10	土師器	甕 (底面)	5a-37	P2		(1.6)		底面はわずかに突出する。	10	8	
11	灰皿器	こみ鉢	1-2a	S31 (焼成焼灰色 10YR4/1 粘砂質土~焼成黒褐色 2.5Y3/1 上 5・6・7層) 上層	取巻	9.0		口縁部を上方にわずかに拡張する。 口縁部内外面同軸ナズ。	13	8	
12	土師器	甕	1-2a	S31 (焼成焼灰色 10YR4/1 粘砂質土~焼成黒褐色 2.5Y3/1 上 5・6・7層) 上層	取巻	2.0		口縁部にはほぼ水平に開く。 底面外面同軸~ヘラ取り状ナズ。	13	8	
13	土師器	甕 (I) (緑~底面)	1-2a	S31 (焼成焼灰色 10YR4/1 粘砂質土~焼成黒褐色 2.5Y3/1 上 5・6・7層) 上層	取巻	(11.4)		口縁部を上方にわずかにつまみあげる。 底部内周縁方向の外。外面2方方向の外へ。	13	8	
14	灰皿器	坪形蓋 (I) (緑部)	1-2a	S31 (焼成焼灰色 K3/0 粘砂質土 8層) 下層		(1.0)		口縁部を下方にわずかに張り曲げる。 口縁部内外面同軸ナズ。	13	8	
15	灰皿器	坪形蓋 (I) (緑部)	1-3a	S31 (焼成焼灰色 K3/0 粘砂質土 8層) 下層		(2.1)		口縁部がわずかに外反する。 口縁部内外面同軸ナズ。	13	8	
16	灰皿器	坪形蓋 (底面)	1-3a	S31 (焼成焼灰色 K3/0 粘砂質土 8層) 下層		(1.7)		底面はやや内側に付く。 底部内外面同軸ナズ。	13	8	
17	灰皿器	坪形蓋 (底面)	1-3a	S31 (焼成焼灰色 K3/0 粘砂質土 8層) 下層		(1.6)		底部内外面同軸ナズ。	13	8	
18	灰皿器	甕 (緑部)	1-2a	S31 (焼成焼灰色 K3/0 粘砂質土 8層) 下層		(2.3)		方形の蓋し。 口縁部内外面同軸ナズ。	13	8	
19	灰皿器	甕	1-3a	S31 (焼成焼灰色 K3/0 粘砂質土 8層) 下層				口縁部内側の上方にのびる。 口縁部内外面同軸ナズ。	13	8	
20	製塩土器	丸底IV a (口縁部)	1-2a	S31 (焼成焼灰色 K3/0 粘砂質土 9層) 下層		(3.6)		厚さ 7 mm。粉縁含む。 口縁部内外面同軸ナズ。	13	8	
21	製塩土器	丸底IV a (口縁部)	1-2a	S31 (焼成焼灰色 K3/0 粘砂質土 9層) 下層		(3.11)		厚さ 8 mm。粉縁含む。 口縁部内外面同軸ナズ。	13	8	
22	製塩土器	丸底IV b (口縁部)	1-2a	S31 (焼成焼灰色 K3/0 粘砂質土 8層) 下層		(6.6)		厚さ 1.2 cm。粉縁含む。 口縁部内外面同軸ナズ。	13	8	
23	灰皿器	坪形蓋	2-1a	S81 (P4) 焼成		(1.6)		実口径は半径で口縁部は短く下方に張り曲げる。 口縁部内外面同軸ナズ。	18	8	
24	灰皿器	坪A	2-1c	S81 (P4) 焼成		4.0		口縁部は短く上方にのび、底部と口縁部の間は広い。 口縁部内外面同軸ナズ。	18	8	
25	製塩土器	丸底IV a (口縁部)	2-1a	S81 (P4) 焼成		(3.1)		厚さ 7 mm。粉縁含む。 口縁部内外面同軸ナズ。二次焼成あり。	18	8	
26	製塩土器	丸底IV a (口縁部)	2-2a	S81 (P16) 焼成		(3.9)		厚さ 8 mm。粉縁含む。 口縁部内外面同軸ナズ。	18	8	
27	製塩土器	丸底IV a (口縁部)	2-2a	S81 (P16) 焼成		(4.4)		厚さ 8 mm。粉縁含む。 口縁部内外面同軸ナズ。	18	8	
28	灰皿器	坪B型 (口縁部)	2-1a	S81 (P2)		(1.3)		口縁部をやや内側に張り曲げる。 口縁部内外面同軸ナズ。	18	8	
29	製塩土器	丸底IV a (口縁部)	2-2a~4a	S820		(2.2)		厚さ 8 mm。粉縁含む。 内面同軸。二次焼成あり。	18	8	
30	製塩土器	丸底IV a (口縁部)	2-2a~4a	S820		(2.4)		厚さ 8 mm。粉縁含む。 口縁部内外面同軸ナズ。	18	8	
31	焼土土器 (底面)		2-4a	P30		(2.7)		底部外面に円蓋状の文様。	18	8	
32	石器	紐式石器	2-4a	P29		(1.6)	1.5	6.3	ウズカイト製。残存重量 0.6 g。	18	11

32は、長さ×幅×厚さ

表3 出土遺物1

番号	種別	器種	出土地点		口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	特徴・技法	押岡	夙版
			地区	上層・遺構						
33	灰皿器	灰皿蓋 (口縁部)	2-1a	S32 (褐色色 1094/1 粘板面砂質土7層) 上層	11.9	(1.9)		口縁部上部は5字状に凹む。 口縁部内外面同軸ナズ。	19	8
34	灰皿器	灰皿蓋 (つまみ)	2-2a	S32 (褐色色 1094/1 粘板面砂質土7層) 上層		(1.5)		つまみは中央部が盛り上がる。 口縁部を下方におおかに寄り曲げる。	19	8
35	灰皿器	灰皿蓋 (口縁部)	2-1a	S32 (褐色色 1094/1 粘板面砂質土7層) 上層		(1.4)		口縁部を下方におおかに寄り曲げる。 口縁部内外面同軸ナズ。	19	8
36	灰皿器	灰皿蓋 (口縁部)	2-1a	S32 (褐色色 1094/1 粘板面砂質土7層) 上層		(5.1)		外反する高台が付く。 体部内外面同軸ナズ。	19	8
37	灰皿器	灰皿蓋 (口縁部)	2-1a	S32 (オリーブ黒色 S3/1 粘質シルト8層) 中層		(3.0)		口縁部は縁やに厚き、地味は太い。	19	8
38	灰皿器	灰皿蓋	2-1a	S32 (オリーブ黒色 S3/1 粘質シルト8層) 中層		2.7		天舟部は笠形で口縁部を下方に寄り曲げる。 天舟部同軸ナズ。	19	8
39	灰皿器	灰皿蓋 (つまみ)	2-2a	S32 (オリーブ黒色 S3/1 粘質シルト8層) 中層		(1.5)		つまみは平ら。	19	8
40	灰皿器	灰皿蓋 (口縁部)	2-1a	S32 (オリーブ黒色 S3/1 粘質シルト8層) 中層		(1.3)		口縁部を下方におおかに寄り曲げる。 口縁部内外面同軸ナズ。	19	8
41	灰皿器	灰皿蓋 (口縁部)	2-1a	S32 (オリーブ黒色 S3/1 粘質シルト8層) 中層		(3.5)		口縁部は外側に厚く。 口縁部内外面同軸ナズ。	19	8
42	灰皿器	灰皿蓋	2-1a	S32 (オリーブ黒色 S3/1 粘質シルト8層) 中層		3.6		口縁部は外側に厚く。 口縁部内外面同軸ナズ。蓋部外面同軸ナズ。	19	9
43	灰皿器	灰皿蓋	2-2a	S32 (オリーブ黒色 S3/1 粘質シルト8層) 中層		3.9		口縁部は外側に厚く。 口縁部内外面同軸ナズ。	19	9
44	灰皿器	灰皿蓋	2-1a	S32 (オリーブ黒色 S3/1 粘質シルト8層) 中層		4.4		口縁部は上方にのびる。 口縁部内外面同軸ナズ。	19	9
45	灰皿器	灰皿蓋 (蓋部)	2-2a	S32 (オリーブ黒色 S3/1 粘質シルト8層) 中層		(2.8)		高台は平ら。 蓋部内外面同軸ナズ。	19	9
46	灰皿器	灰皿蓋 (蓋部)	2-2a	S32 (オリーブ黒色 S3/1 粘質シルト8層) 中層		(2.3)		高台は外側に厚く。 体部内外面同軸ナズ。	19	9
47	灰皿器	灰皿蓋 (口縁部)	2-1a	S32 (オリーブ黒色 S3/1 粘質シルト8層) 中層		(1.7)		高台は外側に厚く。 口縁部内外面同軸ナズ。	19	9
48	灰皿器	灰皿蓋	2-1a	S32 (オリーブ黒色 S3/1 粘質シルト8層) 中層		3.6		蓋部と体部の境が鋭角的。 蓋部外面同軸ナズ。	19	9
49	灰皿器	灰皿蓋 (口縁部)	2-2a	S32 (オリーブ黒色 S3/1 粘質シルト8層) 中層		(1.8)		蓋部と体部の境が鋭角的。 蓋部外面同軸ナズ。	19	9
50	灰皿器	灰皿蓋 (口縁部)	2-2a	S32 (オリーブ黒色 S3/1 粘質シルト8層) 中層		(4.9)		口縁部は「く」の字状に凹む。 口縁部内外面同軸ナズ。	19	9
51	灰皿器	蓋 (体部)	2-2a	S32 (オリーブ黒色 S3/1 粘質シルト8層) 中層		(4.6)		蓋部は丸く、体部中央に穿孔。 体部内外面同軸ナズ。	19	9
52	灰皿器	灰皿蓋 (口縁部)	2-1a	S32 (オリーブ黒色 S3/1 粘質シルト8層) 中層		(9.7)		口縁部はフック状に厚く。 口縁部中央に1本の凹線。	19	9
53	灰皿器	灰皿蓋 (口縁部)	2-1a	S32 (オリーブ黒色 S3/1 粘質シルト8層) 中層		(12.1)		口縁部はフック状に厚く。 口縁部中央に1本の凹線。	19	9
54	灰皿器	灰皿蓋 (体部)	2-1a	S32 (オリーブ黒色 S3/1 粘質シルト8層) 中層		(4.1)		高台は丸い。 行部は1本の凹線。	19	9
55	灰皿器	灰皿蓋 (口縁部)	2-1a	S32 (オリーブ黒色 S3/1 粘質シルト8層) 中層		(4.6)		高台は外側に厚く。 体部外面同軸ナズ。	19	9
56	灰皿器	灰皿蓋	2-1a	S32 (オリーブ黒色 S3/1 粘質シルト8層) 中層		19.3		口縁部は上方にのびて、縁部が外側に厚くなる。 体部内外面同軸ナズ。	19	9
57	土師器	甕 (口縁部)	2-1a	S32 (オリーブ黒色 S3/1 粘質シルト8層) 中層		(3.7)		口縁部は蓋部から丸く上方にのびる。 口縁部内外面同軸ナズ。	30	10
58	土師器	甕 (口縁部)	2-1a	S32 (オリーブ黒色 S3/1 粘質シルト8層) 中層		(3.0)		口縁部が内側に厚くなる。 体部内外面同軸ナズ。	30	10
59	土師器	甕	2-2a	S32 (オリーブ黒色 S3/1 粘質シルト8層) 中層		3.8		口縁部は丸く斜めに厚く。蓋部内面が縁状に厚む。	20	10
60	土師器	甕 (口縁部)	2-1a	S32 (オリーブ黒色 S3/1 粘質シルト8層) 中層		(8.3)		口縁部内外面同軸ナズ。体部外面が丸く。	20	10
61	土師器	甕 (口縁部)	2-1a	S32 (オリーブ黒色 S3/1 粘質シルト8層) 中層		(7.8)		体部外面が丸く。	20	10

表4 出土遺物2



番号	種別	器種	出土地点		口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	特徴・技法	押印	図版
			地区	遺構・土層						
62	土師器	甕 (口縁部)	2-2a	SX32 (オリーブ黒色 5Y3/1 粘質シルト 8層) 中層		(3.3)		口縁部断面を特つ。 口縁部内面横方向のハケ。	20	10
63	土師器	甕 (口縁部)	2-2a	SX32 (オリーブ黒色 5Y2/1 粘質シルト 8層) 中層		(4.1)		口縁部上方にむすびにつまみあげる。 腹面内面横方向のハケ。	20	10
64	土師器	甕 (口縁部)	2-1a	SX32 (オリーブ黒色 5Y3/1 粘質シルト 8層) 中層		(3.5)		口縁部に短く歯部が突起する。	20	10
65	土師器	移動式甕 (底)	2-2a	SX32 (オリーブ黒色 5Y3/1 粘質シルト 8層) 中層				底部部分押え換機方向のナデ。 残存長 6.2 cm、底の長さ約 9.0 cm。	20	10
66	土師器	移動式甕 (側面部)	2-1a	SX32 (オリーブ黒色 5Y3/1 粘質シルト 8層) 中層				側面部は縦方向のナデ。 残存長 14.2 cm、高さ 4.9 cm。	20	10
67	製塩土師	丸底IVa (口縁部)	2-2a	SX32 (オリーブ黒色 5Y3/1 粘質シルト 8層) 中層		(3.7)		厚さ 8 mm、胎盤を含む。 内外面押え後ナデ。	20	10
68	製塩土師	丸底IVa (口縁部)	2-2a	SX32 (オリーブ黒色 5Y3/1 粘質シルト 8層) 中層		(4.7)		厚さ 7 mm、胎盤を含む。 内外面押え後ナデ。	20	10
69	製塩土師	丸底IVa (底面)	2-2a	SX32 (オリーブ黒色 5Y3/1 粘質シルト 8層) 中層		(2.0)		胎盤は入りきみの丸盤。 胎盤含む。	20	10
70	製塩土師	丸底IVa (底面)	2-2a	SX32 (オリーブ黒色 5Y3/1 粘質シルト 8層) 中層		(1.7)		胎盤は入りきみの丸盤。 胎盤含む。	20	10
71	須恵器	坏B蓋 (口縁部)	2-5a	SX32 (緑灰色 K3/0 粘質シルト 9層) 下層		(1.2)		口縁部を下方にむすびに折り曲げる。 内外面回転ナデ。	20	10
72	須恵器	坏B蓋	2-5a	SX32 (緑灰色 K3/0 粘質シルト 9層) 下層		3.1	9.9	口縁部は外側に傾き、高台の縁部は外側に折込む。 口縁部は内外面回転ナデ。	20	10
73	須恵器	長頸甕 (底部)	2-5a	SX32 (緑灰色 K3/0 粘質シルト 9層) 下層		(3.6)		胎盤は胎盤を特つ。一帯の胎盤。 胎盤は内外面回転ナデ。	20	10
74	須恵器	長頸甕 (底部～底面)	2-3a	SX32 (緑灰色 K3/0 粘質シルト 9層) 下層		(7.9)		胎盤は内外面回転ナデ。	20	10
75	土師器	甕 (口縁部)	2-3a	SX32 (緑灰色 K3/0 粘質シルト 9層) 下層		(3.2)		口縁部は胎盤中に外折し、胎盤は大きい。 口縁部内外面横方向のナデ。	20	10
76	土師器	甕 (口縁部)	2-3a	SX32 (緑灰色 K3/0 粘質シルト 9層) 下層				残存長 10.5 cm、最大幅 7.0 cm。 2次焼成を受け、表面がガラス質になる。	20	10
77	土師器	甕 (口縁部)	2-3a	SX32 (緑灰色 K3/0 粘質シルト 9層) 下層				残存長 7.8 cm、底径幅 7.4 cm。 外面は縦方向に胎盤を特つ。	20	10
78	須恵器	こわ餅 (口縁部)	2-0a	灰黄褐色 10YR8/4 極細砂質土～ 灰黄褐色 10YR5/2 粘細砂質土 (1・2層)		(1.0)		口縁部断面をむすびに下方に胎盤する。 口縁部内外面回転ナデ、束縛系。	21	11
79	瓦器	小皿	2-2a	灰黄褐色 10YR8/4 極細砂質土～ 灰黄褐色 10YR5/2 粘細砂質土 (1・2層)		(1.7)		底面外面押え。	21	11
80	瓦器	埴 (底面)	2-1a	灰黄褐色 10YR8/4 極細砂質土～ 灰黄褐色 10YR5/2 粘細砂質土 (1・2層)		(1.8)		胎盤は低い輪高が付く。 底面内面ヘラミガキ、外面押え。	21	11
81	須恵器	(底面)	2-1a	灰黄褐色 10YR8/4 極細砂質土～ 灰黄褐色 10YR5/2 粘細砂質土 (1・2層)		(1.7)		胎盤は不高台をのみ。 胎盤外面回転ヘラ切り。	21	11
82	土師器	(底面)	2-5a	濃褐色 2.5YR2/2 砂～暗黒オリーブ黒色 5Y3/3 砂 (3・4層)		(1.8)		胎盤外面回転ヘラ切り。	21	11
83	須恵器	坏B蓋 (口縁部)	2-5a	灰黄褐色 10YR5/2 粘細砂質土 (5層)		(1.4)		天井部はほぼ平らで、口縁部を下方に折り曲げる。	21	11
84	須恵器	坏B蓋 (口縁部)	2-3a	オリーブ黒色 5Y3/1 粘細砂質土 (7層)		(2.1)		天井部は笠型で、口縁部を内側に折り曲げる。	21	11
85	須恵器	坏B蓋 (口縁部)	2-2a	灰黄褐色 10YR8/4 極細砂質土～ 灰黄褐色 10YR5/2 粘細砂質土 (4・5層)		(3.2)		口縁部は外側に直線状に開く。 口縁部内外面回転ナデ。	21	11
86	須恵器	坏B蓋 (底面)	2-2a	灰黄褐色 10YR8/4 極細砂質土～ 灰黄褐色 10YR5/2 粘細砂質土 (4・5層)		(1.8)		高台は外側に開く。	21	11
87	須恵器	坏B蓋 (底面)	2-3a	オリーブ黒色 5Y3/1 粘細砂質土 (7層)		(1.4)		胎盤の間にやや鋭い高さが付く。	21	11
88	須恵器	(底面)	2-2a	オリーブ黒色 5Y3/1 粘細砂質土 (7層)		(1.6)	5.2	胎盤は小さく、やや鈍い高さが付く。	21	11
89	土師器	甕 (口縁部)	2-2a	オリーブ黒色 5Y3/1 粘細砂質土 (7層)		(2.7)		口縁部断面を特つ。 口縁部内面横方向のハケ。	21	11

表5 出土遺物3

遺物  
一覧表

番号	種別	器種	出土地点		口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	特徴・技法	押図	図版
			地区	遺構・土層						
90	梨飯土器	丸底IV b (口縁部)	2-1a	オリーブ黒色 013/1 粘厚砂質土 (7層)		(3.7)		厚さ 1.0 cm, 特設突起, II層部内外面押え後ナゲ。	21	11
91	梨飯土器	丸底IV a (口縁部)	2-2a	オリーブ黒色 013/1 粘厚砂質土 (7層)		(3.8)		厚さ 3 mm, 特設突起, II層部内外面押え後ナゲ。	21	11
92	梨飯土器	丸底IV a (II層部)	2-3a	オリーブ黒色 013/1 粘厚砂質土 (7層)		(4.1)		厚さ 6 ~ 8 mm, 特設突起, II層部内外面押え後ナゲ。	21	11
93	梨飯土器	丸底IV a (II層部)	2-3a	オリーブ黒色 013/1 粘厚砂質土 (7層)		(2.5)		厚さ 6 mm, 特設突起, II層部内外面押え後ナゲ。	21	11
94	石器	須置式石鏃	2-5a	灰黄色色 10YR5/2 粘厚砂質土 (5層)	(2.6)	(1.7)	0.4	ナメシト製, 残存重量 0.9 g。	21	11
95	石器	須置式石鏃	2-6a	灰黄色色 10YR5/2 粘厚砂質土 (5層)	(1.6)	1.7	0.2	ナメシト製, 残存重量 0.8 g。	21	11
96	土器類	(底部)	3-6a	S81 (P22)		(6.7)		底面外面削削未切り。	27	11
97	土器	埴 (II層部)	3-6a	S81 (P27)		(3.1)		II層部は斜め方向に開く, II層部内外面押え後ナゲ, 体部外面押え。	27	11
98	瓦器	埴 (口縁部)	3-3a ~ 4a	S20		(1.9)		体部外面押え。	27	11
99	瓦器	(底部)	3-14a	P46		(1.6)	2.0	底面外面削削未切り。	27	11
100	土器	埴 (II層部)	3-8a ~ 9a	S83		(2.9)		II層部は斜め方向に開く, 体部外面押え。	27	11
101	梨飯器	(底部)	3-8a ~ 9a	S83		(1.3)		底面外面削削未切り。	27	11
102	土器	小皿	3-6a ~ 7a	S819	3.8	1.8		内面ナメシト, 底面外面押え。	27	11
103	土器類	埴 (底部)	3-7a ~ 8a	P31		(1.5)		底面外面削削未切り。	27	11
104	土器類	(底部)	3-7a	S24		(1.2)		底面外面削削未切り。	27	11
105	土器類	埴 (底部)	3-7a	S24		(1.8)		底面外面削削未切り。	27	11
106	黒色土器	埴 (体部・底面)	3-8a	S24		(3.7)		底面にはやや異形の黒凸が付く, 内面が黒色。	27	11
107	土器	埴 (体部)	3-6a ~ 7a	S24		(2.6)		外面押え。	27	11
108	土器類	(底部)	3-9a	S82 (P36)		(1.6)	1.0	底面外面削削未切り。	27	11
109	土器類	(底部)	3-8a	S82 (P33)		(1.4)	1.2	底面外面削削未切り。	27	11
110	土器類	埴	3-8a	S83		1.8		II層部は、置く側の上方に開く, 底面外面削削未切り。	27	11
111	土器類	(底部)	3-6a	S80		(1.6)		底面外面削削未切り。	27	11
112	黒色土器	埴 (底部)	3-8a	S83		(2.1)		底面に黒凸・角形の黒凸が付く, II層部内外面押え後ナゲ, 内面が黒色。	27	11
113	土器類	須置 (口縁部)	2-8a	S83		(4.9)		口縁部外面削削未切り。	27	11
114	土器類	正 (口縁部)	3-3a	灰黄色 2.5YR/2 粘砂質土 ~ 灰黄色 10YR5/1 粘砂質土 (3・4層)		(2.3)		口縁部は斜め上方に開き, 底面は太い, II層部内外面削削未切り。	27	11
115	瓦器	埴 (器)	3-3a	灰黄色 2.5YR/2 粘砂質土 ~ 灰黄色 10YR5/1 粘砂質土 (3・4層)		(2.5)		体部外面押え。	27	11
116	瓦器	埴 (底部)	3-3a	灰黄色 2.5YR/2 粘砂質土 ~ 灰黄色 10YR5/1 粘砂質土 (3・4層)		(1.6)		底面に浅い黒凸が付く。	27	11
117	瓦器	埴 (底部)	3-9a	黒灰色 10YR5/1 粘砂質土 (4層)		(6.8)		底面に浅い黒凸が付く。	27	11
118	白磁	埴 (II層部)	3-9a	黒灰色 10YR5/1 粘砂質土 (4層)		(3.0)		II層部は開く, 内面外面削削未切り。	27	11
119	梨飯器	(底部)	3-6a	黒灰色 10YR5/1 粘砂質土 (4層)		(1.1)	2.0	底面外面削削未切り。	27	11
120	黒色土器	埴 (底部)	3-8a	黒灰色 10YR5/1 粘砂質土 (4層)		(2.4)		底面に浅い黒凸・角形の黒凸が付く, 内面が黒色。	27	11
121	土器類	須置 (II層部)	3-7a	黒灰色 10YR5/1 粘砂質土 (4層)		(4.1)		II層部内外面押え後ナゲ。	27	11

表6 出土遺物4

91・95は、長さ×幅×高さ

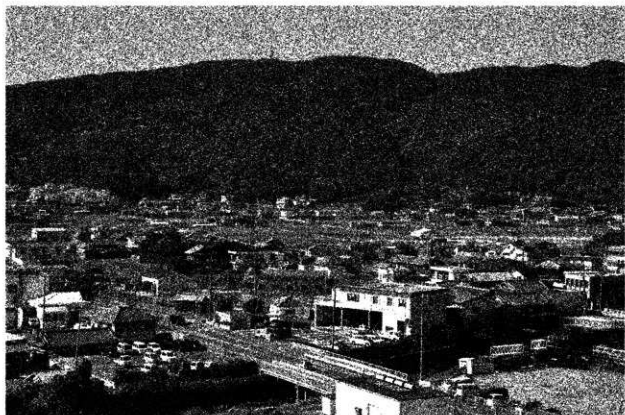
遺物  
一覧表





調査地周辺空中写真(上が北)

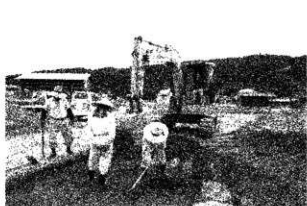
写真図版2 (3・4次調査)



1. 調査地遠景(南東より)



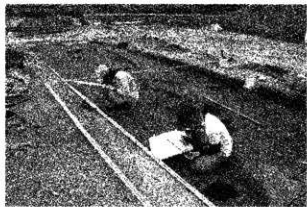
2. 人力作業風景(3次調査・北西より)



3. 3区重機作業風景(4次調査・東より)

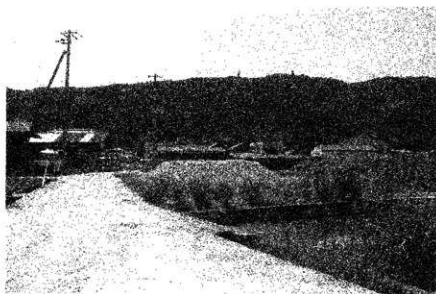


4. 3区人力作業風景(4次調査・南東より)

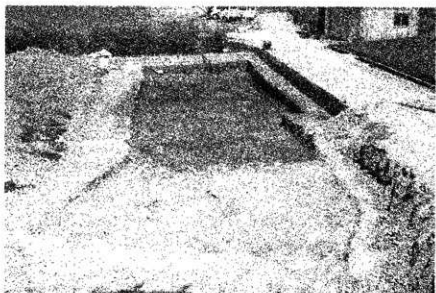


5. 3区補助員作業風景(4次調査・北西より)

写真図版3 (4次調査1区)



1. 1区近景(東より)



2. 1区全景(西より)



3. 1区北壁(2a区)

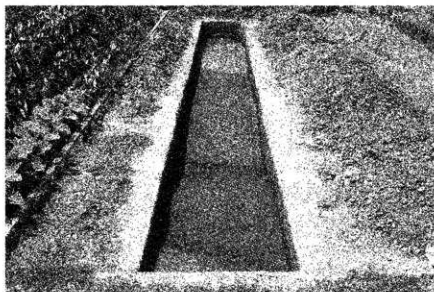
写真図版4 (4次調査2区)



1. 2区近景(北東より)

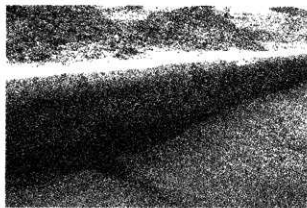


2. 2区全景(南部・北より)



3. 2区全景(北部・南より)

写真図版5 (4次調査2区)



1. 2区 東壁(0a~1a区)



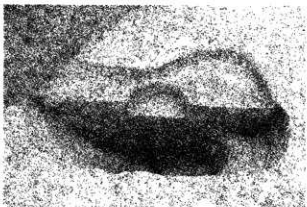
2. 2区東壁(SX 40南側畦畔部分)



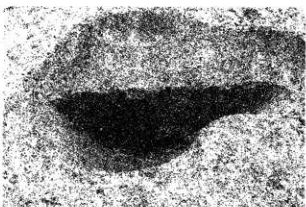
3. 2区SB1-SX 32(南東より)



4. 2区SB1(南より)



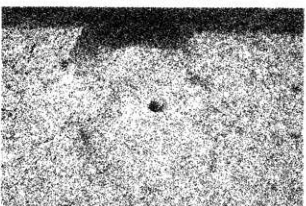
5. 2区SB1(P 4)北西壁



6. 2区SB1(P 7)南東壁



7. 2区SB1(P 16)南壁



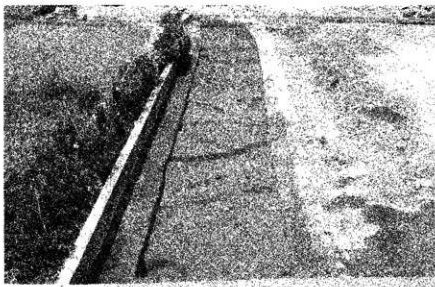
8. 2区SK 20(東より)



写真図版6 (4次調査3区)



1. 3区近景(北東より)



2. 3-1a~5a区(東より)

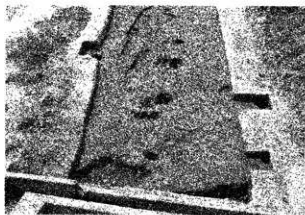


3. 3-6a~13a区(東より)

写真図版7 (4次調査3区)



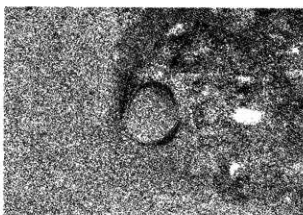
1. 3区北壁(杭8a)



2. 3区SB1(東より)



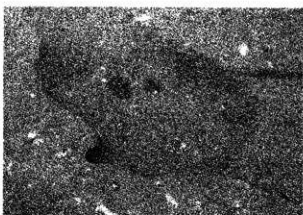
3. 3区SB1(P 21)西壁



4. 3区SK 19 遺物出土状況(北東より)

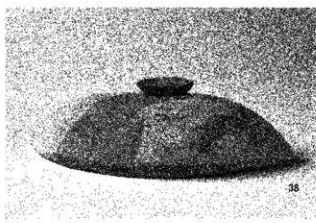
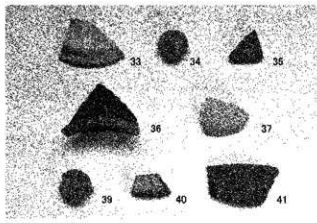
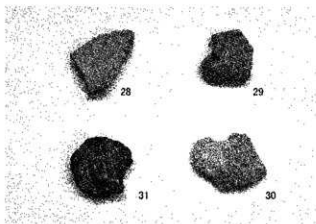
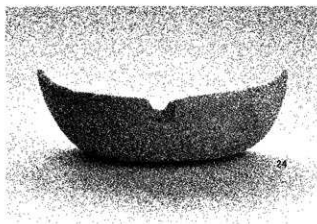
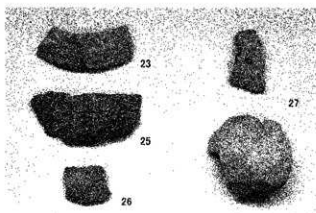
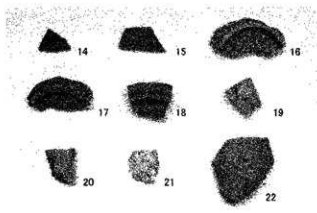
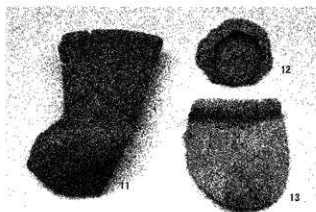
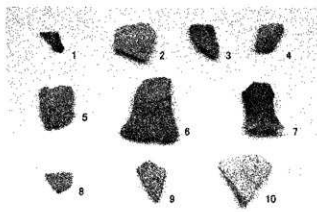


5. 3区SD9(北より)

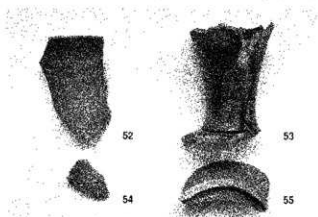
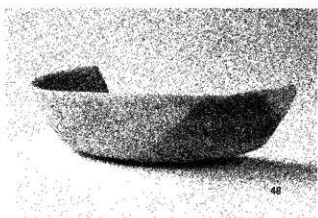
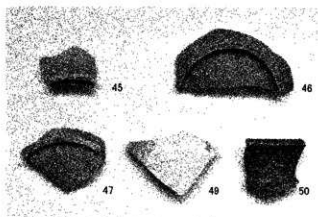
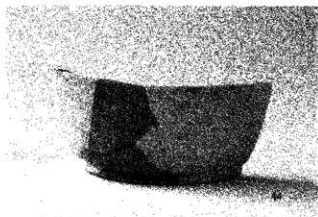
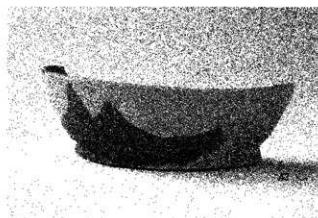
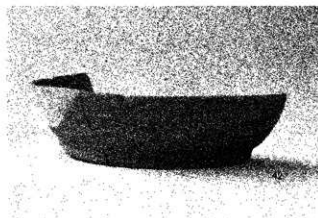


6. 3区SK 50(南より)

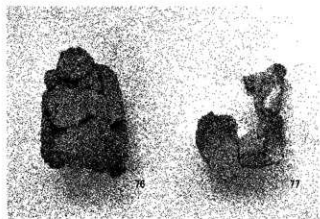
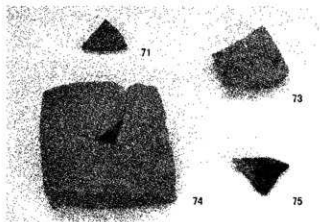
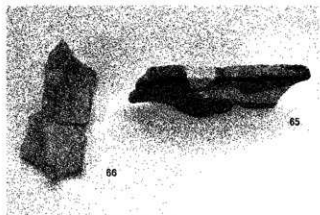
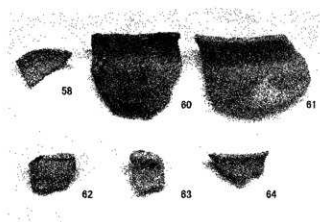
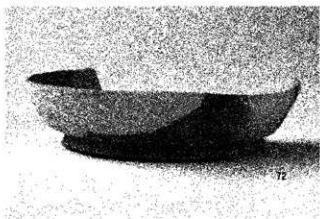
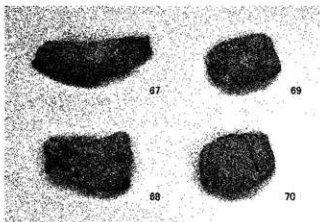
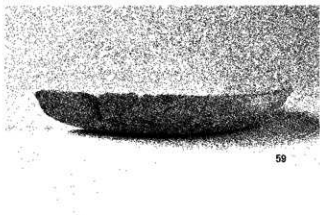
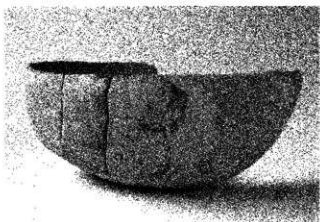
写真図版 8 (3次調査、4次調査1・2区出土遺物)



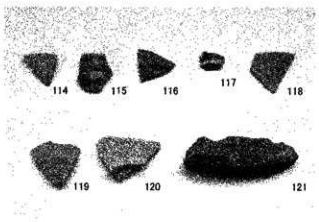
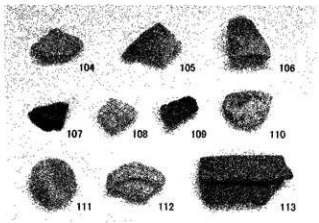
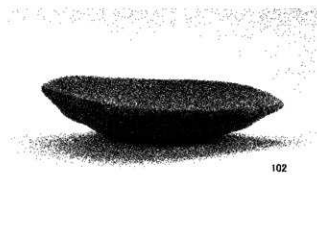
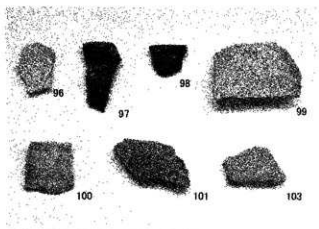
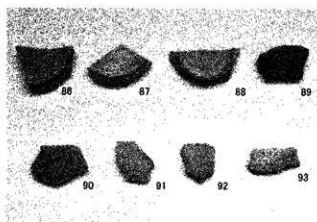
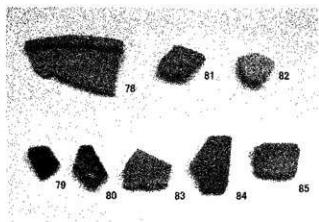
写真図版9 (4次調査2区出土遺物)



写真図版 10 (4次調査2区出土遺物)



写真図版 11 (4次調査2・3区出土遺物、石器)



## 報告書抄録

ふりがな	おおいせき							
書名	大野遺跡 I							
副書名	基盤整備促進事業（八幡地区2-2丁目）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	南あわじ市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第15集							
編著者名	坂口弘真							
編集機関	南あわじ市埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒656-0455 兵庫県南あわじ市神代国衛1100 Ⅱa 0799-42-3849							
発行機関	南あわじ市教育委員会							
所在地	〒656-0472 兵庫県南あわじ市善光寺22番地1 Ⅱa 0799-43-5232							
発行年月日	平成29（2017）年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大野遺跡	兵庫県 南あわじ市 賀集八幡南	28224	970074	34°	134°	平成29年6月 16日～27日	164㎡	五輪環状遺跡等 （八幡地区2-2丁目）
				16'	44'	平成29年7月	513.3㎡	
				22°	31°	17日～8月28日		
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
大野遺跡	集落跡	縄文時代		土版・小穴		縄文土器・石器		
		奈良時代		須石性埴物・埴物・ 埴器・土版・小穴		陶器器・土師器・埴器土器・埴		出土遺物に炭が認められることと周辺域の調査成果から、宮殿的性格の遺跡を考慮する必要がある。
		平安時代		須石性埴物・土版・ 土版（埴器）・小穴		須石器・土師器・黒色土器		
		中世		須石性埴物・土版・埴 小穴		土師器・須石器・輸入陶器器・ 土器		

2017年3月31日発行

## 大野遺跡 I

基盤整備促進事業（八幡地区2-2工区）  
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行 南あわじ市教育委員会

編集 南あわじ市埋蔵文化財調査事務所

〒656-0455 兵庫県南あわじ市神代国衙1100

☎0799-42-3849

印刷 浜田タイプ

〒656-0521 兵庫県南あわじ市潮美台2丁目6-5

☎0799-52-1080